
塔

東河哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塔

【Nコード】

N2094E

【作者名】

東河哲也

【あらすじ】

目的を失った大学生が異世界に迷い込み、これまでに無かった様々な苦しみを体験する。その中で成長していく物語です。

1. プロローグ

橋本小次郎はノリに乗っていた。陸上競技短距離種目100メートル走決勝。福岡県大会の決勝である。決勝戦参加選手は8人だ。小次郎の自己ベストはその8人の中ではおそらく一番悪いであろう、11秒1である。周りを見回すと強力なメンバーである。小倉中央高校の峰岸、戸畑第一高校の国吉、筑豊北高校の平ノ上、八幡東高校の村上、北九州工業の斉藤。陸上競技短距離では有名な高校の、有名な選手ばかりである。その中、小次郎の福岡国際高校は陸上競技では弱小高校だ。その中で、単身、小次郎は、運良く、この決勝までたどり着いた。実力ではこの中では最下位だ。そう考えても小次郎は少しもひるまず燃えに燃えた。高校生活最後のチャンスだった。この中で三位以内に入れば夢のインターハイ出場である。この日のために全てを犠牲にして高校生活を送ってきたといっても過言ではなかった。

小次郎の自己ベスト記録、11秒1はその日のほんの三時間前、100メートル走準決勝にてはじき出したばかりである。この大会に入る前までの小次郎の自己ベスト記録は11秒4であった。予選11秒2、準決勝11秒1と記録を伸ばしてきた。決勝の周りの選手達はみんな10秒台スプリンターばかりである。このメンバーの一員に入れただけでも最高にハッピーだった。小次郎は燃えに燃え、ノリに乗っていた。今日こそ人生で最強の走りが出来そうな気がした。今日こそは高校の陸上競技生活の集大成が実現されそうな予感がした。

「位置に着いて。よーい、どん！」

最高のスタートを切れた。焦らず、一ミリも無駄なく、徐々に前傾姿勢からトップスピードに切り替えていく。最強のメンバー達はやはり彼の一步前を行っている。

「ぶち抜け、粉みじんになれ、全力を尽くせ、すべてを出し切れ」

トップスピードに至った小次郎の頭の中をいつもイメージトレーニングで繰り返していた言葉たちが次々と浮かんでは消えた。小次郎は自分の体が今までで最高のスピードに至ったことを感じ、これまでに最高に解放された気分にも包まれた。彼の体は確かにスピードを上げ、前を走っていた有名選手たちの何人かを確かに捕らえた。

ゴール。

団子状態で小次郎はゴールに飛び込んだ。何着であるか、まったく分からない。一人飛びぬけた小倉中央の峰岸選手はぶつちぎりの一番だった。2着以下は団子状態だ。誰が何着か誰も分からなかった。

ゴールしたばかりの小次郎はガクガクと震えていた。今までで最強の走りだった。それははつきりと分かった。風が悪くなければ確実に自己新記録が出ている確信があった。何着であれ、後悔は全くなかった。15分後、場内アナウンスが鳴り響いた。

「ただいまの高校男子100メートル決勝の結果をお知らせします。1着、小倉中央、峰岸君、タイム10秒6。2着、戸畑第一高校、国吉君、タイム、10秒9。3着、福岡国際高校、橋本君、タイム10秒9。4着、筑豊北高校、平ノ上君、タイム、11秒0……」

橋本小次郎はワナワナと震えていた。福岡国際高校の橋本といえば自分のような気がした。タイムは10秒9。それが自分のことだとはまったく信じられなかった。あごはガクガクとふるえ、手はぶるぶると震えていた。平ノ上にも村上にも斉藤にも勝ったのか？信じられない。向かい風1メートルの中でのスプリントだった。小次郎は観客席の自分の高校の仲間達が居るところに目を向けた。仲間たちは熱狂的に大騒ぎをしていた。しきりと小次郎の方に手を振り、

猛烈な勢いで手招きをしていた。

「やったぞー！小次郎、こじろー、やったー！」

「こじろー！先輩、入ってる、入ってるよ。三位にはいつてるよー！……！」

「こじろー！、すごいぞ！こじろー！お！……！」

全く信じられない気分で、小次郎はがくがくと震える足取りで観客席の方へ向かった。走り寄って来た同級生や後輩、OBの先輩たちが猛烈な勢いでバチバチと小次郎の頭や肩、背中や尻など、叩きまくった。小次郎は今までで最高の幸福感に包まれて、ひとときを送っていた。

2・クラブからの帰路

大学生になった小次郎は陸上競技をすっかりやめて、東京の大学に進学し、今まで陸上競技のために犠牲にしていた遊ぶ時間を取り戻そうとでもするかのように、連日遊び狂っていた。

その日も大学で一番の友人の高山と六本木のクラブで閉店まで遊んでから、二人で渋谷に向かって歩いていった。地下鉄青山何丁目かで降りてしまったのだが、そこからの渋谷までの道のりが思った以上に遠くて、難儀した。二人して代々木公園までようやくたどり着いたときにはすっかり疲れてしまい、二人して缶コーヒーを購入して、真っ暗な代々木陸上競技場を見ながら、ベンチに座り込んでいた。

「考えられるか、高ピー！あいつは小林だけじゃない、リョウとも寺田ともやってたんだぞ。あの女みんなとセックスしまくってやがったんだよ。俺には指一本触れさせなくてよ。童貞の俺をいつも小馬鹿にしてよ。それでやってたんだよ。あいつだけ、俺の知らないところだよ。高ピーお前はやってないよな？……俺は本当に失ったよ。友達も彼女もな。優子の奴、まだ俺が何も知らないと思ってるんだろうな。あいつら……リョウも寺田も小林もよお、俺は友達だと思つてよお、優子のこと、色々と相談してたんだよ、本当に馬鹿だった。あんなクソ野郎と知っていたら……」

その日、小次郎は荒れていた。彼の最愛の恋人、長谷川優子が彼の周りの友人たち複数とセックスをした間柄であることを知ってしまった。すべてが壊れた。今まで大事にしていた友人関係なんかすべて消し飛んでしまった。みんな陰で自分の事を笑っていたのかと思うと切なかった。

「まあまあ、小次郎は真面目すぎるんだよ。まあはつきり言って、あの優子ちゃんとは合わないんじゃないかねえ、余計なお世話だけど。でもまあ、いいじゃないの。ほら、この子に今日の午後にも

連絡してみようよ。可愛かったじゃないの」

そう言って高山はひらひらと紙切れを振って見せた。ついさつき、クラブで知り合って、電話番号を交換した女の子たちの事だった。

「そうだなあ。でもちよつと、女しばらくいいかなとは思うな。しばらくはオナニー専門でいくよ」

小次郎は力無く笑って答える。先ほどまでクラブで大酒を飲み、踊り狂って、始めて会った女の子とキスをして、はしゃいでいたのだが、今はもうさすがに疲れ切っていた。出来れば今すぐ蒲団にもぐって10時間くらい眠りたかった。

「しかしなんだか、あれだな、虚しいな」

小次郎はぼそりとつぶやいた。

「まあ、まあ、それを言っちゃあお仕舞いよ」

高山は苦笑いしてそう答えた。

「もう俺も、いつその事、大学やめようかと思ってるよ。どうせ授業も出てないだし、卒業して就職してとかの決まりきったレールの上の人生つてのもつまらないんじゃないかって思うよ、ホント」

「まあ、まあ、そう言わず、新しい出会いでも探そうよ」

高山は笑って、慰めた。二人はしばらくそんな風にぼつりぼつりと、余り楽しくもない会話を重ねた後、再び渋谷駅へと歩き始めた。

「高ピーは将来とかどうすんだ？」

「そうだなあ、とりあえず公務員を目指すよ。安定してるからなあ。何にせよ、うち母子家庭だからさあ、安定した収入は欲しいところだよ。母親も養っていかないとけないからねえ。今まで育ててもらって、大学まで行かせて貰って、本当に世話になってるからね。まあそれでも五十前くらいになったら仕事もやめて、海外にでも住んでみようと思うよ。ワシ、中国とかタイとか、アジアに興味があつてね」

それを聞いてしばし小次郎はマジマジと高山の顔を見つめた。そ

して言った。

「ほお、そうなのか。始めて聞いた。でも俺らってこんな風に真面目な話するのってめったにないよなあ」

高山は少し恥ずかしそうに苦笑いを浮かべた。そして言った。

「そうだねえ、こういう話もたまにはした方がいいのかも知れんねえ」

その後二人は無言でおのおの考え事にふけり、とぼとぼと駅に向かってひたすら歩いた。そして駅に到着した二人は三十分ほど始発電車を待ち、それから車内で泥のような眠りに入って、帰路に着いた。

3. 不思議な声

しばらく小次郎はめつきり大学には行かなくなった。友人ともほとんど会わなくなった。電話がかかってくるのも面倒になって、電話回線をいつも外していた。彼は連日、家に閉じ籠つて酒ばかり飲んでゐた。酒を買う時についてに食料も買う。スーパーと家との往復だけが彼の外出のすべてだった。

その日も、酔いつぶれて死んだようにぐったりと部屋の中で横になっ

「うねしょ」

彼の頭の中で何かが喋っているような気がした。彼はぼんやりとそれを聞いていた。言葉にならない言葉達が頭の中で嵐になつていくようにも思えた。何にも考える事もなかった。ただ頭の中の言葉の嵐をぼんやりと眺めている風であつた。

「小次郎、何やってんの、ホントに、馬鹿じゃないの？ほんとあんたは世界一の馬鹿だね。きやはははははははははははは」

ふいに小次郎はむくりと上体を起した。なんだ今のは？何か頭の中で彼に語りかけたような気がした。彼はぞつとした。狂つてしまつたのかという思いがチラリと浮かんだ。彼は恐怖に怯えて洗面所で顔を洗いに行く代わりに日本酒をカップ半分、たつぷりと注いで飲んだ。そして再び、しばらく横になつてみた。

「また飲んでるの。馬鹿じゃないの。死ねばいいのに。人間じゃないね。豚だね。きやははは」

再び彼は上体を起した。完全に何かが彼の頭の中で喋っていた。これはなんだ？なんなんだ？狂ったのか？やべえやべえ。

小次郎の中で恐れよりも好奇心が勝った。再び飲んで、じつくりと頭の中の声を眺めた。

「あなたはあ——、私を——、知ってるの——？知ってるの——？気付いているのねえ。返事をしてごら——ん」

「ああ、分かるよ。聞こえるよ。君は誰だ。綺麗な声だ。妖精か何か？」

思わず小次郎は上体をまた起こし、はっきりと声に出して呟いてみた。あわてて再び寝そべり、不思議な声の返答を待った。いつまでたっても返事は得られなかった。小次郎は再び身体を起し、なみなみ一杯、日本酒を飲み干した。そしてぐったりと倒れこんだ。そして辛抱強く、待った。あの美しい言葉はいつまでたっても聞こえてこなかった。彼はいつしか寝込んでしまった。

4・声の正体を調べる

この5日間ほど、小次郎は大学の図書館に入り浸りだった。深層心理学などの本を片っ端からめくってみて、あのよな声が聞こえる原因を探ろうとしていた。この日も収穫がなく帰路に付く前に校内のベンチで座ってコーヒーを飲んでいた。

「おー、ひさしぶり、小次郎。今まで何してたの？」

そこに高山が通りかかり彼に声をかけた。そして小次郎の隣りに座った。

「……よお、いやあ、あのさあ、ちょっと変な事聞くようだけど、いいかな」

小次郎はぼんやりと高山の顔を眺めて言った。

「あのさ、高ピー、おれの頭の中に女の子が住んでいるみたいなんだよ。それでね、酔っ払うとしゃべり出すんだよ。おれがね。おれがベロンベロンに酔っ払うとね。しゃべるんだよ。どう思う？」

「……ごめん、言ってる意味が分からない。なんなのかな」

小次郎は何とか酔っ払った時に頭の中から聞こえてくる女の子の声を説明しようとしたが、頑張って説明しようとするればするほど、高山の顔が曇ってきた。

「……と言うか、お前、顔色悪いぞ。病気じゃないのか？ちゃんと食ってるのか？」

高山は話を変えようと声のトーンを明るくした。その意図を読み取って小次郎は説明を諦めた。それにこれ以上、図書館に入り浸っても収穫は少ないようにも思えた。

「じゃあ、おれそろそろ帰るよ。用事があったな。また今度」

小次郎はふいに立ち上がり、そっけなく高山にそう告げて、さつさと駅の方へと歩き始めた。

5・再び酒飲み生活

その後やはり連日、アパートとスーパーの往復だけの毎日を送った。やはり電話回線は切つてある。酔つ払つて夢と現の区別が曖昧になった時には決まつて頭の中の声は聞こえてきた。いつも常にだった。ゆえにこれは完全に夢とは思物だと思えた。その日も大酒を飲み、やはりぼんやりと魅力的な美しい、天真爛漫な頭の中の声を薄ら笑いを浮かべながら聞いていた。こちらから話しかけたり、返事をしたりしようとするとう頭の声は消えてしまふ。それも、もうはつきりと分かつている事だった。連日、彼女の会話を聞いているうちにいくつかの事が分かつてきた。彼女の名前もその一つだった。彼女の名はサリーといった。

「コジ、またこんなにも飲んだのね。いい加減にしたら。馬鹿みたいよ」

小次郎がそれに答えようとすると集中は乱れ、会話は閉ざされることになる。

「それにしてもコジ、あんたすごいよ。よく私の言葉に気付いたね。普通絶対、私の事は気付かない筈よ。よっぽど暇なのね」

サリーはケラケラと笑う。

『お前は一体なんなんだ。一年くらい図書館に缶詰にならないと突き止める事はできないのかな』

ぼんやりと小次郎は考えた。

「馬鹿ねコジ、判る訳ないじゃない。あなた達、人間なんて、この世の中の上っ面だけをちょこちょこ調べて、偉そうに判った様な顔をしてるけど、まったくのスルスカなのよ。私の世界の事なんて、この先、千年頑張つてもたどり着けないよ。あはははは、このバーカ」

その小次郎の考えが聞こえたかのようにサリーはそう言った。サリーは魅力的だった。何もかも知っている様で、そのくせ何も教え

てくれず、小次郎をからかってばかりいるのだが、その気楽で無邪気な喋り方が、とても心地良かった。いつしか小次郎は昼も夜も関係なく、サリーに会うために酔っ払ってばかりいる生活が続ける事になった。

サリーは彼の体を心配しだったが、彼が一向に聞こうともしないので、彼女は歩み寄りを許すことになった。

「コジ、あんたがそんなに私の事、好きなのならしょうがない。今日から一ヶ月間、食事は一切してはだめ。口にするのは水だけにしよう。もしそれが出来たら、ちょうど一ヶ月後のあなたの誕生日10月25日に、あなたの夢の中に現れる事を約束するよ。それが出来なければ私は二度とあなたに会わない。覚悟して取り組みなよ。じゃあねバイバイ。バーカ」

小次郎は約束通り、一切食事せず、ただ水だけでその日を向かえた。そしてその日、彼は死んだような眠りに入った……

6・異世界の入り口

「……オース！元氣？」

小次郎は夢の中で目覚めた。あたりは上も下もなく色とりどりに光輝いていた。彼はふわふわと宙に浮かび、時に横向き、時に下向きになる。彼のとなりには小さな女の子が立っていた。

彼女はひとり安定し、立っていたのだ。彼女は6才の子供の様に背が低く、その背丈以上に髪の毛は長く、まるでパンクミュージシヤンの様に虹色に染まったその髪は逆立っていた。顔色は限りなく白く、健康的にも不健康にも見えず、それでいて、血の気はまったく感じられない。小次郎を一番驚かせた彼女の瞳は、宇宙につながる空洞、その瞳の奥には無数の星ぼしが見えた。

「何しに來たの？」サリーはたずねた。

「ここはどこだよ？」呆然と我を忘れた小次郎はやつと意志を取り戻し、尋ねた。

「ここはここよ。なに言ってんの。相変わらず馬鹿ねー」

ケラケラと楽しそうに彼女は笑う。小次郎の体は彼女と反対向きに流れ、頑張つて態勢を彼女に向けた時、彼女の瞳は打つて変わつて強い光を発していた。あまりの眩しさに何も見えなくなる。

「あなたの心は判る。でもあなたはここに来るべきではなかった。あなたがここに来るのはあまりに傲慢な事だったのよ。あなたは自ら望んでこのあなたがいるべきでない、この世界に来てしまった。あなたは多分後悔する。あなたは急ぎすぎた。あなたが望むものはここにはない」

彼女の声だけが聞こえる。彼の眩んだ目はダメージを回復出来ずにいる。

「それでもあなたは來た。だから私は、私が与えるべきものを与える。あなたは幸せにはなれないかも知れない。それでもここに来たからには、ここで経験すべき事を経験して帰つてよ。長い旅にな

るよ。絶対後悔するよ」

サリーはますます大きな声で笑った。サリーの声は子供の声、無邪気で残酷なものだった。

「あなたは塔に入る。狭く高い塔にね。あなたの決断はそこに通じる。あなたが望む、望まぬに関わりなく、あなたの決断はそこに通じる」

小次郎の体が解けていった。彼は自分の体が爆発したのを感じた。彼は気を失った。

7・一階

「どけ！」

小次郎は誰かに頭を打たれて意識を回復した。なんだここは……。小次郎の目に映った風景はなんの変哲もないのどかな田園風景だった。よくよく見てみると遙かかなたに断崖が見える。見渡すとその断崖に囲まれているようだ。しかし太陽もあり、木々が生い茂り、草、田んぼ、昆虫、ごく平凡な田舎の風景だった。

小次郎がぼんやりと風景を眺めていると、向こうから三人組の男が近づいてきた。助かった。あの人達に色々訊ねようと彼は立ち上がり、待っている、その三人組は彼を取り囲み、三方向から殴りつけてきた。小次郎は顔を何度も殴られ、腹を蹴られ、押し倒されて、何度も何度も踏みつけられた。

「やめてくれ！！」

小次郎は叫び、土下座すると彼らは気が済んだようで、「こんなところに座ってんじゃねえぞ！ 氣にいらねー野郎だ」と言い残し、立ち去った。

一体どうなつてんだ？ 小次郎は立ち上がり、近くの小川で顔を洗っている、後ろからいきなり、子供に蹴りつけられた。彼は頭から小川に突っ込み、怒りで身を震わせて、その子供を睨みつけるとその子はすぐに逃げていった。

「馬鹿野郎！ 死にやがれ！」

子供は遠くから罵声を上げた。なんなんだ？ 彼は怒りの眼であたりを見渡すと、すぐに通りがかりの鍬を持った農民がつかつかと歩み寄ってくる。

「文句あんのか？」

彼は鍬を握る手に力を込めて、凄んでくる。

「な、なんなんですか！！」

小次郎が叫ぶといきなり、鍬を振りかぶり、彼の頭めがけて振り

降した。

「うわー！助けてくれ！人殺しー！」

小次郎は一目散に逃げ出した。彼はすっかり胆を冷やし、森に目がけて逃げ込んだ。彼は息を整え、しばらく茂みで休んでいると一匹の虹色の毛並みの猫が近づいてきた。

「コジ……」

その猫は話しかけ、それがサリーである事に気付いた。

「なにやってんのコジ。意気地がないね。ちゃんと戦わないと」

さも軽蔑したように猫は言い、小次郎の膝に乗ってきた。

「なんなんだ！ここはどこなんだよ！」

彼は叫んだ。

「静かに！また気付かれるよ。ここは嘘と憎しみと戦いの世界よ。だいたい何よ、あなたは一ヶ月間の断食に耐え抜いた癖に、からつきし意気地がないじゃない。そんなではこの世界で生きてはいけないよ。やる気あるの？」

それを聞いて小次郎は啞然とする。

「ふ、ふ、ふざけるな！なんなんだよ、一体。今すぐもとの世界に戻せ、この野郎！」

彼は猫を掴み上げようとしたが、するりと避けられた。

「コジ……あんたって最低ね。今さらなによ。もう戻れないよ。なんなのあんた。なにいつてんの今さら。戻ることなど考えないでなんのつもりなの？私を馬鹿にしてるの？あなたはここで生き抜くしかないの。死ぬまでこの住人なのよ。それはあなたの望んだ事なのよ」

「なに？俺はこんなもの望んだ覚えがないぞ」

猫はそれを聞いてさも軽蔑したようにニヤアニヤアと二回鳴いた。

「あなたは夢と希望とロマンと戦いを望んだわ。戦いを望んだのよ。ここではそれがあるわ。ここは力がすべての世界よ。力さえあればなんだって手に入る。地位も名誉も権力も、女だってよりどり

みどりになるわ。力あるものがすべてを支配し、好きな様に出来るのよ。あなたが望んだ世界なの。あなたの一番望んでた世界なのよ」

「何を……何を言ってるんだ！」

小次郎は狂った様に猫を追いかけて廻した。猫は木に飛び乗り、上から話を続けた。

「あなたはいい加減な人ね。若い人だわ……。まあとにかく好きにきなさいよ。言っておくけどここでは弱い人はさんざんな目に合うわよ。のたれ死ぬだけ。とにかく私はあなたの望むものを与えたわ。じゃあね。バイバイ」

猫は飛び降り、疾風の如く走り去った。

8・逃げまわる小次郎

深夜、外には人がいなくなる時間帯を見計らって、小次郎は森から抜け出した。森にある果物だけでは空腹は満たされない。彼は目星をつけていた畑めがけて、低い姿勢で素早く移動を始めた。ぐずぐずしてはいられない。とにかくてきぱきと仕事こなす事が必要に思えた。畑に入り込むと手当たり次第に穀物、野菜を抜き取った。あまり派手にやりすぎるのも恐ろしく思えた。彼はボロボロになった服の中、ズボンの中に収穫物を次々入れ、そろそろ頃合かと判断し、素早く畑を後にした。

【ガラガラガラガラガラ！！！！】

小次郎が何かの縄のようなものに足を引っ掛けてしまうと、辺りに激しく鐘が鳴り響いた。

「こらー！ー、殺すぞー！ー、こらー！ー！！！」

待ち構えてでも居たかのようにそこの村人たちらしき人間の声がすぐに聞こえた。1人2人ではない。10人くらいはいるのではないだろうか。真つ黒な人影が猛烈な勢いで小次郎の方へと向かってきた。小次郎は完全に度を失い、手に持っていた芋や大根をすっかり地面に落としてしまい、しばし棒立ちになった。そしてすぐに我に返ると、脱兎の如く逃げ出した。待ち構えていたらしき村人の一人が彼に飛び掛かった。小次郎はなんとかその手を振りほどき、猛烈な勢いで森の中めがけて走っていった。村人は簡単には引き下がらなかった。森の中の茂みの中に逃げ込んで、息をひそめている小次郎のまわりをたいまつを持って行ったり来たりしていた。肩に斧を担いでいるもの、ナイフらしきものを振り回しているもの、みな何かしらの危険な武器を所持していた。小次郎は子猫のようにぶるぶる震えていた。いつそ目を閉じて、目の前の現実を忘れてしまいたい気分であったが、見つかったその瞬間には全力で再び逃げ出さねばならない。彼は細心の注意で村人達の動向を見守っていた。

たつぷり一時間ほど、森の中をうろつきまわった村人たちはようやくにぎやかな笑い声を辺りに響かせながら帰っていった。彼らにとつては今回の狩りはお祭り感覚のようであつた。小次郎は彼らが立ち去った後もたつぷり二時間はぶるぶると震え続けていた。明かりに照らされればはつきりと分かるだろう。彼は真つ白な顔色をしていた。ようやく少し落ち着いた小次郎はズボンの中に残つていた芋を上着で丹念に擦り、そのまま齧つた。小川まで芋を洗いにいく気にはどうしてもなれなかつた。

9・怒り心頭

昼の間、小次郎は森に隠れて過ごしていた。夜にそなえて少しでも眠りたいのだが、なかなかうまくはいかない。子供達の存在が脅威だった。実生活では小学生ぐらいの子供達である。ここでは中学生ぐらいの年齢の人間はもう一人前の男として振る舞っていた。子供達は遊び感覚で昼間どこかに隠れている小次郎を探していた。そして見つけると仲間達に報告し、棒切れや石などを持って、大人数で押し寄せて来た。いまましい思いで小次郎は逃げ回った。子供達は一人では決して向かってこないが、五人六人と集まると平気で襲い掛かってくる。中には大人のような大柄な子供も居た。小次郎はいつもろくなものは食われておらず、げっそりとしていた。こんな生活がいつまでも続くわけはなかった。ある日とうとう、小次郎の堪忍袋の緒が切れた。

「貴様らあー！ー。もう許さんぞ」

小次郎は襲い掛かってきた子供達10人以上にいきなり突撃した。陸上競技で鍛え抜いた瞬発力はまだ充分残っていた。そう簡単に衰えるような半端な鍛え方ではなかった。子供達はひるんだ。小次郎の狂気だった剣幕に完全に浮き足立った。小次郎は手当たり次第に棒や石を取り上げ、反対に情け容赦なくその子供に向かってその武器を使った。子供達は泣き叫んで逃げ回った。大柄なボスの子供は青ざめた顔つきでずっとその様子を見守っていた。小次郎がボスの子供にも目を向けて、さあこいつは特別、痛めつけてやろうと足を向かわせると、ボス是一目散に逃げていった。その逃げっぷりはあまりにも思い切ったものであったので、小次郎は追うこともせずに呆気にとられて見送っていた。

10・ガキ大将・小次郎

その後しばらくは子供たちは彼を探し回ることをすっかりやめていた。どうやらきつちり恐怖心を植えつける事ができたようだ。小次郎はホツとした。夜はまた縄に足を取られ、鐘を鳴り響かせるようなへまをしないように慎重に行動した。村人たちは彼がほんの少々、畑から物を盗み出すのは、あまり気にならないようだった。そもそも人の物を盗んだり、人を殴ったり、殺したりといった事がここでは当たり前のように行われているようだった。小次郎は心底、この世界の人間にはうんざりした。大人も子供も最悪だった。いっそ皆殺しにしてやるうかと思つた。小次郎の生来の気短で気性の荒い性格がここでの生活で徐々に発展してきた。

数日間が過ぎしていると再び子供達が彼を探しまわり始めていた。最初やはり彼は隠れたり、逃げ回っていたりしたが、小次郎はだんだんと怒りや憎しみの塊のような状態になってしまい、しまいには逃げるのをすっかりやめてしまった。彼はここの子供達を全員、殺してしまおうかと考えた。ある日小次郎を見つけた子供は、例によつて仲間を呼ぶのだろつ、かなたへ駆けていった。そして小次郎は逃げもせず、残忍な薄笑いを浮かべ、彼らの到着を待った。今日こそは殺してやる。彼は内心考えていた。

『さんざん殺す殺す言いやがつて。反対にこつちが殺してやる。

あのクソ餓鬼ども、びっくりするだらうなあ。フッフフ』

小次郎はそう考えて拳をぽきぽき鳴らしていた。

やがて子供がやってきたが意外にもたったの三人だった。その中には彼らのボスであろう、大柄な子供もいた。

「どうもおいちゃん、こんにちは。この間は悪かつたね」

ボスが小次郎にそう話しかけた。びっくりしてその顔を見ると随分親しげな表情を浮かべていた。

「いや、悪かつたね。うちの者が散々迷惑を掛けて。この通り、

お詫びする。水に流してくれ」

餓鬼大將は大人ぶった口調でそういった。

「何しに來たんじゃこら。お前らぶつ殺すぞ。お？」

小次郎は自分でも驚くようなヤクザ口調でそういった。昔、不良漫画に嵌って読み続けていた時期があった。その中の登場人物にでもなったような気分だった。

「今日は話をしに來ましたよ。おいちゃんをおれ達のリーダーに迎えたいと思う」

餓鬼大將は全く動じた気配もなく、落ち着いた口調でそう言った。さらに続けた。

「おれの名前はピートって言います。ここの餓鬼達を取り仕切ってる。大人に対しても多少は顔が利くんだよ。でもおいちゃん、強いね。びつくりしたよ。ここの大人でも、おれたちをあんな目に会わせる事の出来る奴はそうはいないよ」

小次郎は餓鬼大將ピートの顔を忌々しげに睨みながらにじり寄って、その胸倉をいきなり掴んだ。その落ち着いた態度が無性に気に入らなかった。

「あはははは、いたたたた、やめてくれよ。弱いもの苛めすんだよ。なあおいちゃん、おれ達のリーダーになってくれよ。そうすれば食いもんは俺たちが調達するし、おいちゃんが知りたい情報もおれ達がすぐに仕入れてくる。寝る場所だって、着る服だっておれ達が無んとかする。悪い話じゃねえだろ。おいちゃんが仲間になってくれば、おれ達も大人連中にも睨み利かせる事も出来るようになるかも知れないだよ。なあ、おいちゃん、手を離してくれよ。おいちゃん、名前なんていうんだよ？」

さすがに餓鬼大將ピートは真つ青な顔つきになって、しどろもどろにそう言った。小次郎はピートの怯えた顔つきを見ることが出来てようやく少し気が済んだ。そしてピートの髪の毛を引っつかみ、彼の身体を引き寄せると豪快に持ち上げ、地面にたたきつけた。

「おい、お前らは帰れ」

小次郎は連れの二人にそう命じた。二人は背中をまともに打ちつけ、苦しんでいるピートを怯えた顔つきで見っていた。咳き込みながらもピートは二人に軽く二度、頷いて見せた。それを見て二人は逃げるような早足で去っていった。

「なあ、おいちゃん、頼むよ。名前なんていうんだよ」

「あ、おれの名前かあ？おれはなあ」

そう言つてようやく立ち上がったピートのみぞおちに思い切り蹴りを入れた。ピートは悲鳴を上げて上体をくの字に曲げた。そしてようやく答えた。

「小次郎様つていうんだよ。呼び捨てでいいから読んでみる。小次郎様だ」

「あ、ああ、わかったよ。小次郎……様だな。宜しくな」

「ああ、こちらこそ、よろしくな！」

そう言つて小次郎はまたしてもピートのわき腹に廻し蹴りを食らわした。

11・深夜のリンチ

小次郎の生活は一気に快適なものになった。食事も服も酒も不自由はなくなった。その日も彼はベロンベロンに酔っ払って用意されたネグラへと戻った。

『ここでの生活も悪くないな。これでいい女でも調達できれば文句はないのだが。まあガキ共には無理な話だ。やはり大人連中も牛耳る必要があるな。すべての欲望を全部満足させてやる。村にはいい女がたくさんいたな。あれは全部俺のものにしてやろうかな。フッフッフ』

この世界は力がすべてだという。そしてその気になった自分にはどれだけの力でも手に入るような気がした。とにかく女が欲しかった。やってやってやりまくるぞ。小次郎は股間をふくらませ淫らな空想に浸っていた。やがて彼は眠りに落ち、すぐに高いびきをかき始めた。安心しきった快適な睡眠だった。

突然、小次郎の寝ている部屋のドアがゆっくりと開いた。そして数人の棒を持った10歳前後くらいの子供たちが部屋に入ってきた。小次郎はまったくそれに気付かず、眠っていた。子供達の一人は掛け布団をめくった。そしてその場にいる全員で、寄つてたかつて小次郎を手を持った棒で殴り始めた。猛烈な勢いだった。相手を殺すつもりじゃないと殴れないような殴り方だ。小次郎の片目がつぶれ、鼻が潰れた。小次郎はただひたすらうずくまっていた。数名の子供達の影は何一つ言葉を漏らさず、やがて去っていった。

血だらけの小次郎はブルブルと震えていた。恐怖に完全に支配されていた。さっきまでのふざけた考えのためにバチが当たったように思えた。

『怖い。もう嫌だ。もう逃げよう。また姿を隠して生活しよう。子供とはいえ。恐ろしい。命があるだけ助かった』

一晩中、彼はうずくまり震えていた。やがてあたりは明るくなり始めた。彼は恥も外聞もかなぐり捨てて血だらけのまま外へ飛び出した。そしてコソコソと歩き始めた。あたりは段々と明るくなり、小鳥がさえずる気持ちの良い早朝となった。その心地よさの中、小次郎の恐怖心は徐々に薄れてきた。そしてその代わりに今度は猛烈な憎しみがやってきた。彼は小川まで歩き、顔を洗った。水に映った腫れあがった顔はいつもの倍の大きさに見えた。

『ぶつ殺してやる……』

さっきまでの恐怖に震えていた男とはまるっきり正反対の男が小次郎の中から出てきた。彼は自らのネグラに戻り始めた。残忍な表情でニヤニヤと笑っていた。明らかに犯人は自分の手下だ。そしてそんなものは調べればすぐに分かる事だ。そんな事をしそうな人間のおおよその見当もつく。ピートが犯人であるとは考え難かったが、その可能性もある。必ず犯人を見つける。そして……

『まあ殺すのはよしてやるか。可哀相だもんな。相手はただのクソ餓鬼だ。そう目くじら立てる事もあるまい。あいつらはきちんと教育して女や食い物をたつぷりと貢がせなければならねえからな。家畜のようなものだ。馬鹿もハサミも使いようってな。ただきつちりとシメねえといけねえ。もう二度とこんなふざけたことをしないようになあ。まあ事によると何匹か殴り殺してみるか。まだ人殺しは経験ないから面白いな。しかしもう酒はやめよう。これからはきちんと気をつけねえとな』

小次郎はぶつぶつとつぶやきながらネグラに戻った。

12・復讐

ネグラに戻った小次郎はベッドに横になり、余裕しゃくしゃくでピートが来るのを待っていた。ピートは毎朝、彼の元にやってきてそれからいつもぴったりと彼のそばに控えていた。いつもの時間になるとドアがノックされた。

「入れ」

小次郎はそう怒鳴った。

「どうも。小次郎様。おはよう」

ピートはそう言つて朝から清々しい顔をして入つて来た。そして小次郎の姿を見て目を見張り、啞然とした様子を見せた。その様子を見て小次郎は犯人はピートではないように思えた。

「おい、このざまだ。お前じゃないだろうな」

「うん、ちがうよ。誰がやりやがったのかな……」

小次郎はヨロヨロと立ち上がった。全身が痛んだ。この世界には医者には居なかった。潰れた鼻も目もそのままだ。

「おい、ピート、今からみんなを集めて、ちよつと聞いて見る。疑わしい奴を選ぶぞ。襲つて来たのはおそらく4、5人だったと思う。とりあえず6人くらい選ぶぞ。そしてその6人には地獄を見てもらふ。今すぐ集めろ」

殴られる時、立ち去る時、小次郎はかすかに人影を見ていた。犯人は子供であることは間違いなかった。一時間も経たないうちに悪がきメンバーが集まった。小次郎はふらふらとした足取りで一人一人じつくりと顔色を見た。はつきりと疑わしい者が二名、怪しい者はたくさんいた。小次郎はとりあえず適当に6人を選んで、自分の前に並べた。みな一様に顔色を失っていた。

「いいか、お前ら、おれの顔を見る。このざまだ。誰がやったか

は知らん。でも許さん。こいつらが犯人かどうかは知らんが犯人の代わりに痛い目に合つて貰う。いいか、よく見とけ。後日、別の犯人が見つかったら、こいつらの倍以上の地獄を見せる」

そついうと小次郎は突然一番端の子供の腕を取り、猛烈な勢いでその腕をねじつた。

【ぱきっ！】

鳥の関節をへし折るような音が鳴り響いた。腕を折られた子供は悲鳴を上げて、地面に倒れこんだ。

「さあ、次お前、出ろよ」

小次郎は怪我人とは思えない力で子供を抱き上げて、岩に向かつて投げつけた。子供は気絶した。今度はナイフを取り出し、次の子供のアキレス腱を深々と切った。次の子供には目に指を入れて、ぐりぐりとかき回した。

「さて、次はお前だ。お前が一番怪しいんだよな」

小次郎は薄ら笑いを浮かべながらそう言った。その少年はピートの次に体が大きかった。小次郎はつかつかと少年に歩み寄り、思い切り殴り付けた。そのまま殴って殴って殴りまくった。倒れた少年に馬乗りになり、モロに顔面を殴り続けた。少年の歯はすべてへし折れた。そして少年の顔は親でも見分けられない程に潰れてしまった。泡を吹き、全身を痙攣させていた。

「なんだ畜生。まだ生きてるのか？ なかなか人間は死なねえものだな。まだまだ俺も鍛えねえといけねえなあ。さて、最後はお前か？ どうしてやろうか」

最後の子供は失禁していた。アゴはガクガクとふるえ、必死に許しを乞うた。その様子を見て、小次郎は非常に愉快だった。数時間前に殺されかけたのだ。目の前の子供はその犯人か、その犯人だと思なされた者だ。

「じゃちよつとこの木に登つてごらん」

小次郎は残忍な顔つきでそついった。

「もつと上、もつと上……よしそこからこの岩目掛けて飛び降りろ

よ。岩からずれたら、もう一回だからな」
子供は泣きながら飛び降りた。足首がへし折れた。

13・初めての殺人行為

日々を重ねるにつれ小次郎は憎しみの塊へと変貌していった。周りに居る人間のすべてが憎くて憎くて仕方がなかった。ピートは彼に忠実だったが、その子分たちはいつも小次郎を憎々しげに睨んでいた。そして小次郎と目が合うと引きつったような笑顔を向けた。誰もが小次郎を心底から憎んでいて、小次郎も彼らを憎んでいた。それでも小次郎グループとして団結力はあった。逆らうものは小次郎による残酷なリンチが待っていた。大人たちは小次郎が目障りでしようがないようだった。

ある日、屈強な農民が道で小次郎と出くわした。小次郎のそばにはいつもピートが控えていた。農民はまっすぐに小次郎を睨みつけた。小次郎も憎々しげに睨み返した。農民は鋤を持っていた。

「なんだ手前この野郎。殺されてえのか」

農民は小次郎に凄んだ。小次郎は無言で顔を農民の顔の数センチのところまで突き出した。

「なんだこらあ」

農民は再び呟き、鋤を握り直した。小次郎は無言でニヤニヤと笑っていた。農民は突然、鋤を振りかぶった。小次郎はその瞬間を待っていたように農民に飛び掛かった。農民の両手首を掴み、そのまゝ足をかけて地面に倒した。そして鋤を取り上げた。

「殺すってか？じゃあ俺が手前を殺しても文句はねえもんな」

小次郎はそう呟いて、農民の胸目掛けて鋤を振り下ろした。ぐさりと突き刺さって農民は絶叫した。

「うるせえなあ、手前この野郎。静かに死ねねえのか、ふざけやがってよおおおおおお」

小次郎の中で何かが爆発した。彼は狂った様に鋤を農民に振り下

ろし続けた。1回2回3回4回5回6回7回8回9回…

「ふざけやがつて手前、殺すだとお。殺してみろよ。おー、こーろーしーてーみーろーよおおおお、おおお、こらああああ、こらああああ」

農民はとつくに完全に息絶えていた。小次郎はそれでも狂ったように鍬を打ち下ろし続けた。彼は強烈な快感の只中にいた。

14・恐怖の小次郎

この世界の人間は基本的には各自孤立していた。各自が各々を憎みに憎み切っていた。小次郎グループは団結していた。このグループは非常に恐れられた。

数年が過ぎて、ピート他一部の子供たちはもうすでに子供と呼ぶにはふさわしくない成長を遂げていた。それでもピートは小次郎に忠実で、グループを纏めていた。

小次郎グループは村を訪れた。道行く大人達は小次郎を見るとこびへつらう様な態度を見せた。この数年小次郎は殺しに殺しまくった。殺すことは何よりの快楽だった。

「小次郎様、ここですよ。この家です」

「おお、じゃあ、ちよつと呼んでこいよ」

小次郎はそう言った。彼等は自分達のグループに逆らう者を探していた。この家に住む村人は小次郎の命令に逆らった。一日娘を貸せという命令を無視した。小次郎は飛び上がって喜んで早速その命知らずの家に来た。

「おお、お前か。いい根性しとるの、お？」

小次郎は残忍な薄笑いを浮かべ、村人を小突き始めた。村人は小次郎を前にして、完全に戦意を喪失していた。小次郎はピートに命じて、村人を村の中央へと連れて行って、村の連中にそこに集まるようにと命じた。みな誰も逆らえずそろそろと出てきた。

「じゃあ、お前にはどんな目にあってもらうかな、そうだな……」

小次郎は薄ら笑いを浮かべながら、しばし考えていた。そしてふいに彼の目はキラキラと輝きだした。

「おもしれえ事、思いついた。おいナイフかせ。そいつは上着脱

がせる。そしてうつぶせにしるや。こりやおもしれえぞお」

上半身を裸にした村人を子分達に抑えておくように命じる。そして小次郎は村人の首の後ろから尻にかけてナイフで切り目を入れた。まるで料理か何かをするような淡々とした作業だった。村人は大絶叫を上げ、気を失った。小次郎はまだやめようとはしなかった。何かしらの作業に夢中になっていた。

「ほら、もうちょっと切れ目を入れる。ちょっと水ぶっかける。よしよし、そうそう、おい、みんな見とけよ」

小次郎は村人達に大声で声をかけて、ナイフの切れ目から丹念に背中の皮を剥ぎ始めた。村人は痛みで目をさました。

「起きてろ。なるべく頑張れ。簡単に死ぬなよ。抑えろ、抑えろ。へ、この豚野郎が」

小次郎は夢中になって村人の背中の皮をナイフでゆっくりと剥いでいった。村人は痛みによる大絶叫の末、絶命した。それでも小次郎は皮を剥ぐことをやめず、背中の皮をすっかりと剥ぎ取ってしまった。赤い筋肉や白い脂肪がむき出しになった。

「おい、なんか牛肉みたいだなあ。食ってみるか。え、おい」

小次郎は狂気の目つきで笑い転げ、そう仲間達に声をかけていた。

最初の頃は、小次郎はただひたすら一生懸命だった。全力で周りの人間に恐れられようとしていた。そして怖がられること、恐れられる事ばかりを考えているうちに、残虐行為が楽しくなっていた。もうほとんど人間の心を失っていた。

15・最強のグループからの誘い

小次郎グループは村で一番大きな屋敷を根城にしていた。そこに小次郎はハーレムを作っていた。その日も昼間から女たちから全身マッサージを受けて小次郎はうつとりとして過ごしていた。彼の全身の筋肉は連日の格闘のトレーニングと命の危険の緊張感のためガチガチにこわばっていた。

ドアがノックされ、手下の一人が青ざめた顔つきで部屋に入ってきた。そして部屋の隅で座っていたピートに何か耳打ちをした。ピートの顔もとたんに青ざめた。

「ちよつと小次郎様、出かけてくるよ。すぐ戻るからね」

ピートはそう言うて手下と一緒にいそいそと部屋を出た。小次郎は何事かの異変を感じて女たちを部屋から一人残らずさがらせた。そして立ち上がり軽くストレッチをして、それから長椅子に悠々と座り込んでピートの帰りを待った。

一時間ほど後、ピートは真つ青な顔つきで、それでも無理やりな笑顔を作って部屋に戻ってきた。

「いやー、小次郎様。カイザーグループの連中が来ちゃったよ。カイザーグループ十剣の内の一人、ガンジルという奴だ。でもまあ心配しなくていいよ。なんかカイザーグループは今、谷のガーシャグループともめているらしくてね、近々、全面的な殺し合いをおっぱじめるらしいよ。それに我々のグループも参加してくれないかという話なんだよな。小次郎様は今、留守中という事にしてとりあえず俺が話を聞いておいたよ。後で直接会って返事をしてもらわなければならぬよ」

ピートは震えを帯びた声でそう説明した。カイザーグループについてはこの世界最強最大のグループという事で頻繁に話題に上がつ

た。この世界最強の戦士で常に鋼鉄の鎧と兜、鋼鉄の剣を身に付けているカイザー。人間離れた体力の持ち主でグループのNo.2の女戦士ユリリー。そしてカイザーグループ十剣といわれる戦いの実力者10人。完全実力主義の戦闘集団であった。

ピートと綿密な打ち合わせをこなした後、小次郎は手下数人を従えて満面の作り笑いを浮かべながらカイザーグループのガンジルの待つ場所へ行った。

「どうもガンジル殿。始めまして。私がこのグループを仕切っている小次郎と申します。谷のガーシャグループとの件、お聞きしました。ぜひ戦争には参加させていただきます。喜んで力をお貸します。カイザー様に宜しくお伝えください」

戦いへの参加を決定した小次郎はそう丁寧に告げた。そして彼らの歓迎の宴をもよおし、細心の注意で接待をした。夜はガンジルのもとにハーレム一番の美女を派遣した。十剣の一人、ガンジルは翌朝気分良く帰って行った。

谷のガーシャグループはほぼ皆殺しにされ、一部のメンバーは逃亡した。この件をきっかけにカイザーグループと手を組んだ小次郎たちはますます、殺戮の日々を送った。その中で彼は狡猾さ、残忍さ、保身の技術を磨きに磨いた。そして絶え間ないストレスの中、自らの権力を強めていった。

16・カイザーの失踪

この国において、小次郎グループはカイザーグループに次ぐ第二の巨大グループに成長した。そのカイザーグループととりあえずは友好関係にあった。しかしこの世界においての友好関係ほど当てにならないものはない。こちらに付け入る隙が少しでも発生すればあつという間に踏み潰されてしまうだろう。カイザーグループの長、カイザーほど恐ろしい存在はなかった。彼の残虐さと強さはこの世界全体に鳴り響いていた。小次郎はカイザーを徹底的にマークした。毎日何人もの偵察を送り、カイザーグループにも何人ものスパイを送り、徹底的に監視していた。もちろんカイザーグループからのスパイも、潜り込んでいるだろうことは容易に想像できた。

そんなある日、屋敷の庭で日課になっていた格闘のトレーニングに汗を流す小次郎の下に腹心のピートが血相を変えて飛び込んだ。た。

「小次郎様、小次郎様！おい、大変だ！」

普段は冷静の塊のような男、ピートが物凄い興奮を見せていた。

「いなくなつたんだ、カイザーのあんちくしょうがいなくなつたんだよ。チャンスが来たんだよ。チャンスが！ぼやぼやしちやいられないんだよ！おい、おい、小次郎様、聞してるのかよ。いなくなつたんだ！いーなー！なつたーんだーよー！おい！！」

ピートの情報はいつも正確でおまけに彼は決して冗談を言わない男だった。小次郎の顔色はとたんに青ざめた。

「カイザーが消えた。どこかに出かけたわけでも隠れているわけでもないらしい。おれはなあ、ずっと見張っていたんだ。このところずっとカイザーが不在だった。何かたくらんでいると思つた。ずっと見張っていた。そして今だ。今、情報が入った。今日の朝五時、

No2のユリリーが新しくリーダーになったんだ。カイザーがいなくなっただよ。どこかに隠れたか、ユリリーに毒を盛られたか……分からない。でもユリリーにはあの巨大グループを統べる力はない。おれと小次郎様ならのつとれる！さあ！宣戦布告だ！同時に徹底的に寝返り工作も行おう。勝てる。絶対に勝てる。完全に勝てる！！」

「よし！寝返り工作はすぐ始める！みんなを集める。片っ端からだ。武器を用意しろ。でもカイザーの行方も探せ。罠かも知れない。慎重にやらねばならない。とにかく戦闘用意をして、それからユリリー本体の場所に移動するぞ。とにかく寝返り工作は今すぐだ。今すぐだ！」

小次郎の判断は早かった。腹心のピートの判断には絶対の信頼を寄せていた。ピートには機を見る才能がずば抜けてあった。ここは、スピード勝負、ピートがそう判断したならそれは間違いないように思えた。

ユリリーは女だった。この世界の女たちのカリスマだった。女たちは誰もがユリリーを非常に尊敬していた。ユリリーの存在のためカイザーグループでは女もたくさん支配階級に入っていた。女とは言え、戦闘能力はずば抜けていた。人間離れした体力の持ち主だった。しかもカイザー以上に残酷でヒステリックな女だった。カイザーグループの有名な処刑法、一年処刑もユリリーが考案した。一年間少しずつ身体を切り刻み、じわじわと処刑していくという、相手の尊厳もプライドもズタズタにする恐ろしい処刑法だった。ユリリーがトップに立ったと言う事はますますカイザーグループは女上位のグループへと変貌するだろう。それは誰にでも容易に想像がつくことだ。だからカイザーグループの男たちは今なら寝返りにコロリと応じる。それははつきりと間違いないと思えた。

一週間後、予想通り、カイザーグループの男たちは易々と小次郎の呼びかけに応じた。カイザーグループは一斉に内と外から攻撃を

受けた。カイザーグループは消し飛んだ。ユリリーたちは早々と見切りをつけ、必死に逃げ去った。その一部のグループは今後はユリリーグループとしての活動を始めた。全員が女だった。

その結果、小次郎はこの世界の王になった。しかし小次郎の首を狙う恐ろしい人間も同時にケタ違いに増えた。小次郎の暗殺の可能性も恐ろしく増えた。この世界では誰もが王の座を狙っていた。

カイザーの行方はいつまでも分からなかった。カイザーは寝る時も全身を鋼鉄の鎧と兜に包んでいた。兜を脱いだ姿を見たものは、ほとんどいなかった。そしてすぐに脱ぎ捨てられたカイザーのものらしき鋼鉄の鎧や兜、大剣が発見された。本人を見つけるのは難しく思われた。本人はユリリーから殺されたという見方が支配的だった。

数年が過ぎた…

17・深夜の物音、隠れ家への移動

小次郎が村の根城の屋敷のベッドで眠っていると、かすかな気配がした。彼は即座にそれに反応して目を覚ました。寝ている時にリソチを受け、鼻と片目を潰されてしまった経験の後、彼は完全に熟睡することが出来なくなった。どんなささいな物音にでも反応し、不安が収まらない時は物置に移動して睡眠を再開したり、いくつもある隠れ家の一つに移って睡眠を取ったりした。

彼はあたりを長い間伺った。何も音はしない。もう一度眠ろうとするとやはり何かの気配を感じた気がした。彼はガバリと立ち上がり、いつも枕元に備えてある斧の柄をがっちり握り締めた。そして彼はそのまま外に出た。彼は寝巻きは着なかった。いつでも戦える服装でいつも常に過ごしていた。隠れ家には村人に作らせた寝袋が備えてある。彼はどこの隠れ家にしようかとしばし迷った。とにかく追跡者がいないことを確認することだ。彼は早足で歩き出した。すべては気のせいかも知れなかった。しかしそれが完全に気のせいだと確信できるまでは油断はできなかった。曲がり角を曲がり、その片隅にじつと息を潜め、しばし待った。猫が視界に入った。さらにしばし待った。不気味な鳥が飛び去った。さらに待つ。誰も来ない。またさらに待つ。大丈夫な気がする。

小次郎は曲がり角など、身を隠せるところを通りすぎるたびにこんな風にしばらく様子を見た。完全に眠気などは覚めていた。いつでもどこでも戦わなければならない。彼を恨んでいる人間は無数にいる。彼は残酷な処刑を極度に恐れていた。自分自身がいつもやっていることだった。

ようやく安心した小次郎は森の中の隠れ家へと向かった。彼はとぼとぼと歩きながら考えていた。本当は眠っている間の警備が必要

だった。しかし誰一人信用できなかった。ピートは彼に忠実だったが、やはり信用できなかった。むしろ一番恐ろしいのはピートではないかと思えた。ピートは今では成長し、昔のような子供ではなくなった。背丈は小次郎よりも高くなった。筋力も強かった。もしピートが敵にまわったらと思うとぞっとした。彼はピートを何かの理由をつけて処刑をしようとも検討していた。しかしそうすると困る事もたくさんある。とにかくピートは役に立つ男だった。殺してしまうか、このまま利用し続けるか、難しい選択だった。

18・森の中に到着、10年ぶりのサリ―

昔みんなから逃げ回っていた時によく使っていた森の中の茂みにもぐり込んだ小次郎はマントに身を包んで、目を閉じた。もう二、三時間で陽は登り始めるだろう。再び生き残るための全力の戦いの一日が始まる。実質的にこの世界の王となった今でさえ、彼はいつ命を落とすかわからないプレッシャーの只中にいた。おそらくこの世界の住民で、一寸先の己を保証できる人間は一人もいないように思われた。彼は少しでも体力を回復させようと目を閉じたまま体中の力を抜いた。そしてようやく睡魔が訪れた。

「ぎゃーーーーーー!!!!!!」

ざらりとした何かがいきなり小次郎の頬に当たった。完全に油断していた彼は大絶叫を上げた。そして茂みから這い出そうともがいた。完全に腰が抜けていた。立てない。

『死んだ』

彼はそう思った。怯えた目つきで辺りを見回した。夜は終わりを向かえ、辺りは薄明かりになっていた。彼の目に飛び込んできたのは虹色の猫だった。

「あ・た・し」

虹色の猫はそう言っ、全く警戒をせずに小次郎に近づいてきた。猫が喋った。小次郎の頭は混乱していた。虹色だ。珍しい。こんな色の猫は始めて見た。いや…

「お前は…」

「にやにやにやにやああああん。なに？わっしの事忘れたでござすなあ。馬鹿なんだねえ。今も変わらず。あなたの永遠の馬鹿に乾杯。にやにやにやにやああああん」

「サ、サリ―……」

小次郎のぎりぎりに張り詰めていた緊張感が一気に解けた。彼はふいに10年前の感覚に戻った。何か急に魔法が解けたような気分だった。

「コジ。すごいじゃん！ちゃんと立派にやってるじゃん。へへへ何それウインク？あ、片目ないんだ。バカー、何その鼻、潰れてるよ。はずかしー。でも素敵、大好き！全く怖い顔になっちゃってさ」

小次郎の頭が不意に真っ白になった。彼はゆらゆらと茂みに戻り斧の柄をがちりと掴んだ。そして真っ青な顔つきでいきなり猫に襲い掛かった。

「お前……この野郎……殺してやる！！！」

小次郎は斧を振り回し、猫を殺そうとした。しかしいつもすんでのところで猫はすりすりりと斧をかわした。いくら狙っても全く当たらない。今一步のところでしかしすべて外れる。とうとう小次郎は諦め、斧を足元に落とし、座り込んでしまった。

小次郎はわなわなと震えだした。今までの十年間の己の生活の記憶が一度に蘇った。その記憶は彼を圧倒した。いつまでも彼の震えは止まらなかった。

『殺人、殺人、殺人、殺人、人殺し、殺人、人殺し、人殺し……』

彼はアゴをぶるぶると震わせていた。女も子供も老人も容赦なく、殺した。殺して殺して殺しまくった。一瞬、彼は自分が気が狂ってしまうのではないかと思った。

「おれは……殺した。たくさんの人を。お前のせいで……もう、駄目だ。もう終わりだ。生きてはいけない。取り返しのつかない事をしてしまった……人間のやる事じゃない……」

それを聞いて虹色の猫は大爆笑した。

「あははははははははは、何言ってるの？あんたはよくやったよ。たいしたもんだよ。あなたは这个世界でべき事をやったのよ。ベストをつくしたのよ。这个世界で気の利いた連中はみんなやって

ることよ。あなたは自分の望みを達成した。あなたは英雄なのよ。それがわかんない？」

虹色の猫はぴょんぴょん垂直に飛び跳ねて、心の底から嬉しそうに爆笑し続けた。

「俺は生きるために頑張ったんだ。ただがむしやらに頑張ったんだ……みんなやってた事だ。俺がやらなくとも誰かがやったんだ……仕方が無かったんだよ」

「あはははははははは、何落ち込んでんの？馬鹿、まさに馬鹿！あなたは人を殺したわ。残酷なもんよ。あなたは自分が生きるために、自分の望みを叶えるために何千人も殺したわ。気付かないと思う？あなたはそれをとて楽しんだ。楽しくないとあそこまで人を軽々しく殺せないよ。そうね言わば、あなたの命は千人の犠牲の上に成り立っているってとこかしら。いや……英雄ね……、あんたみたいなのを人は皆、英雄っていうんじゃないかしらね。つまりそうね、きつとあなたは今、英雄の苦しみてものを味わってるんだわ。素敵。大好き。かつこいい……」

猫は爆笑を続ける。小次郎の頬から後から後から涙が流れていた。わなわなと震える手で頭を抱えこんだ。耐えられなかった。背負うことはとても出来ない巨大な圧力を感じた。

「……………」

爆笑に爆笑を重ね、楽しくてたまらないかのように小次郎をジロジロ眺めていた虹色の猫が唐突に爆笑をやめた。

「にや……」

猫はそういつて、そろりそろりと小次郎に近づいた。そして長い間、うつむいたままの小次郎の顔を覗き込んでいた。

「あんた今、死ぬ決心をしたね。馬鹿、死んでどうなるの？……ここから出たい？」

小次郎は弾けるように頭を上げ、かじりつくように猫に飛びついた。

「……出れるのか？」

「なんなんだあ？出てどうするの？今までの事、何事もなかった事にしてぬけぬけと生きていくつもり？素晴らしい！素晴らしい！厚かましさ！驚き！まさに英雄の器ね」

「出れるのか出れないのか、どっちなんだ！！！」

小次郎は叫んだ。

「登れるよ」

「なに？」

「出れないけど、登れるよ。昔いったじゃん。ここは塔なのよ。狭く高い塔よ。忘れたの？登る？」

「ふ、ふ、ふざけるなあ！！！」

小次郎は再び足元の斧を引っつかみ、完全に狂ってしまったような猛烈な勢いでめちやくちやに斧を振り回した。

「出せ！もとの世界へ戻せ！何が塔だ。何が狭いだ。殺してやる

！！！」

斧は虹色の猫を直撃した。猫の額は真つ二つに割れた。そしてその傷跡から虹色の光が次から次へと溢れてきた。そしてその光りが集まって髪の毛を逆立てた少女の姿になった。瞳は空洞で星々が見えた。無限の宇宙に通じているようだった。その瞳はまっすぐに小次郎を見ているようだった。

「登るのか、登らないのか、どっちだ」

サリーの態度は一変した。限りなく厳かで果てしなく大きな意志を感じさせてそう言った。その唇は仮面以上に厳格に結ばれ、一切の反駁を許さなかった。小次郎の怒りは一気に覚め、代わって恐怖に支配された。

「お、お前は何者だ。悪魔か？」

サリーはまったく答えない。答える気配が微塵もなかった。まるで石になったように見えた。死神そのものの様に沈黙を守っていた。小次郎は震えていた。沈黙は耐えがたかった。やがて彼は叫んだ。

「登るさ。登るしかないなら、登るぞ。俺はとことんまで生きて

やるんだ！！」

小次郎はやけくそになって叫んだ。それを聞くとサリーの姿は一変した。さっきまでの不気味な怪物の姿は嘘のように消え失せた。代わっていつもの愛くるしい少女の姿になった。

「そう、登るんだ。いいのお、そんな事いつて。知らないよ。死んだ方が楽かもよ」

サリーはケラケラと笑った。

「な、なんなんだお前は」

怯えた小次郎の姿を見て、サリーはますます楽しそうに笑った。

「あははははははは、なにびびってんのよ。人殺しの癖に。とにかくそう簡単には登れないよ。簡単に登らせて貰えるなんて絶対に考えないで！あなたはそう、もう五年間この世界にとどまるの。嘘と憎しみの世界にとどまるの。そしてその間、一度も人を傷つけては駄目。嘘と憎しみ、戦いを一切拒否するの。どう、出来る？簡単じゃないよね。でもそれが出来たら登らせてあげる。出来なかったらもう終わり！」

そういい終わると、ふいに強烈な閃光がサリーの瞳から溢れ出した。彼はその眩しさにひとたまりも無く気絶した。そして小次郎は目覚めた。またしてもこの世界に。嘘と憎しみと戦いの世界に。

19・殺しに来た住民、逃げる小次郎

この世界は狭くない。小次郎は自らが王であつた集団とは遠く離れた場所で息を殺して生きていた。住民の畑には一切手を出さなかつた。それがどれほど危険な行為かは彼は痛いほど知っていた。

この日もいつものように昼間は土の中に潜つて身を隠していた。夜になると小次郎は食料を求め、森の中を歩き回つた。虫、野菜、果物、キノコ、鳥、ねずみ、野良犬、野良猫。彼はなんでも食べた。その日も熱心に土をいじり、ミミズのようなものを取つて食べていた。とにかく常に空腹だつた。長い逃亡生活の末、小次郎はすでに人間というよりも野生動物に近かつた。昼間は土に潜つてじつと潜み、夜にだけ行動する。それでしばらくは住民たちには気付かれないう。それでもやがては気付かれる事になる。まず最初に子供達が気付く。そしてやがては大人たちが気付く。そしてやがては小次郎を殺しに来るのである。それはいつものお決まりのパターンだつた。ミミズを食べていた小次郎は物音に気付いた。どうやら来た様だと思つた。また殺しにきたのだ。どこに行つても決してそつとしておいては貰えない。

『何一つ、迷惑を掛けていない。目に触れる事さえも全くしていない。畑にも家畜にも全く手を出していない。しかし彼等はおれを殺しに来る。これは一体なぜなんだ。ここの住民はなんなんだ』

小次郎はここの住民とのかかわりを完全に絶つてから長い時間が経過したので、彼らの気持ちがあまた分からなくなつた。自分とはまるで違う動物であるようにさえ感じた。

あたりではつきりと物音が聞こえる。何か囁きあうような声、小声で冗談を言い合つて笑い合っている声も聞こえてきた。小次郎はひっそりと物音一つ立てずに森を移動し、そのままその土地を去つ

た。新たな土地に移動する。その場所の目星はいくらでもつけていた。今の彼にはいかにして生きていくかという事しか頭になかった。深夜食事をしながらも、時には次の移動先を探し回ってもいた。常に食料を探し、常に次の移動先を探す。そして決して空腹でない時はない。それが彼の生活のすべてだった。

20・先客に驚く小次郎

その日、夜が明ける前に始めての森に入った。そしていつもの如く、茂みの中に穴を掘り、そこにすっぽりと身を隠した。そしてその中でただひたすらじっとしていた。辺りは昼になっても彼の世界は真つ暗だった。ただひたすら五感を研ぎ澄ましていた。ほんのかすかな物音、かすかな臭い、かすかな空気の変化、それらすべてを敏感に感じ取った。そして極力人に気付かれないようにと集中していた。空腹は凄まじかった。彼はもう木の枝のようにやせ細っていた。それでもひたすら夜になるまでじっとしていた。昼の間、彼は半分寝て、半分起きているような状態だった。かすかな臭い、空気、音の変化に敏感に反応し、寝たり起きたりを繰り返した。

『こんな生活がいつまで続くのだろう。もう長い時間が過ぎたのではないだろうか。もう時間の感覚がほとんど分らない。昼が来て、夜が来る。その繰り返しが続くばかりで、重ねられた事だろうか。モグラのような生活だ。肌はすっかりとかさかさでブツブツだらけで、人間の肌ではなく、象か何かの皮膚のようになってしまった。もう人間らしい姿でもないように思える。命を守り、保つだけの毎日だ』

小次郎は土の中に潜み、ぼんやりとそんな風な事を考えていた。この逃亡生活の中、彼はいくたびも自らの人生を見直していた。命を守ること、命を保つ事のほかにそれはそれしかする事も無かった。小学生の頃、彼は餓鬼大将だった。しかし小学六年生の頃、喧嘩で負けた。そして喧嘩に負けた相手から苛められ、そしてその相手から逃げまわる日々だった。そして地元でも有名な不良中学校に入った。彼は周りの不良たちに怯えながら中学校生活を過ごした。やはり一

部の不良たちに苛められた。彼はひたすら目立たないように、不良たちから目を付けられないように、不良たちを怒らせないようにとばかり気を使い、生活を送っていた。一部の不良たちからは通りがかるたびにサンドバッグのように殴られ続けた。彼はヘラヘラと作り笑いを浮かべながらそれにじつと耐えた。小次郎は体力は有る方だった。だから本気で喧嘩をすれば彼等のほとんどに勝てる筈だった。しかし心が完全にいじけていた。極めて弱気だった。臆病者だった。

高校生になった小次郎は植え付けられた強烈な劣等感からの脱出のため、狂った様に陸上競技短距離走に打ち込んだ。脚には自信があった。狂ったように走りこみ、狂った様に筋肉を鍛えた。高校二年生の頃、中学の頃のいじめっ子の一人と街で出くわし、ひとけの無い公園に連れて行かれ、小突き回され、金をせびられた。その時、小次郎は極めて冷静にこう決めた。

『こいつを殴ろう。そして徹底的に喧嘩をしてみよう』

小次郎はいきなり相手を渾身の力を込めて殴りつけた。

「何すんだ手前この野郎。ぶっ殺すぞこの野郎！」

相手はそう言いながらも、小次郎の強烈なパンチをくらい、一気に戦意を喪失し、走って逃げ去った。小次郎はぼんやりとそれを眺めていた。

その後、その相手の親から小次郎の親へと苦情が入った。暴力行為を受けて顔面が骨折し、歯が何本か折れたという事で警察に訴えると相手の親は言った。小次郎の親と相手の親との話し合いの場が持たれ、小次郎の親は30万円ほど相手に支払い、示談となった。小次郎は謝るようにと親から命令されたが頑固に謝らなかつた。自分が悪い事をしたとはまったく思わなかつた。ただ自分が誇らしかつた。弱々しかつた自分から一皮むけたような気がした。そしてますます陸上競技に取り組んだ。そしてインターハイに出場するま

でになった。そして大学生になって、遊びまくった。長谷川優子という誰もが認める美人の恋人も出来た。しかし裏切られた。友人たちにも裏切られた。ただ一人、高山という友人だけは誠実だった。そのほかの友人らしき人間も親も誰一人信用できなかった。しかしその高山とも特別に親しい間柄でもなかった。考えて見ると、誰一人、愛していない気がした。愛する人間は一人もないような気がした。

新しい森に移動したばかりの小次郎は、日中の間はそんな風に自分の人生を振り返りつつ土の中でひっそりと過ごしていた。

『?????』

小次郎の五感は何かの違和感を感じていた。そして夜になって、夜の生物たちが活動を始めた時にもやはり何かの違和感が残っていた。彼は土から出てきて、いつものようにこそそこそと食料を探し歩いた。何かの気配がした。彼は立ち止まりじっと感覚を研ぎ澄ました。そして動き出し、そしてまた立ち止まった。

『なるほど、そういうことか。驚いたな。こんな事は始めてだ』

小次郎ははつきりと悟った。この森には先客が居るのである。人間の気配を感じ取ったのだ。小次郎はそれを知ると次の森へと移動した。

21・二階・巨大な図書館

暗闇でうごめき、土の中に潜む。殺しに來た気配を察知したら他所に移る。同じような日々の繰り返しだった。小次郎はマツチ棒のようにやせ細り、体中はブツブツだらけだった。その日もいつもの如く、昼間は土の中でひたすら息を潜めていた。そして少し眠ってしまったようだった。

その短い睡眠から目を覚ました時、彼はまったく見知らぬ場所にいた。小次郎はその衝撃のあまりしばらくピクリとも動けなかった。状況がまったく把握できない。かび臭く、本棚のようなものがたくさんある。そして人の気配がする。しかしひっそりと静まりかえっている。室内であつた。あたりは薄明かりに照らされていた。彼はちらりと天井を見た。天井一面が優しく白く、光っていた。

『落ち着け』

小次郎は自らに言い聞かし、出来る限り低い態勢を取った。そして目についた本棚の陰に素早く移動した。

『ここはどこだ。一体なにがおこつた？』

彼は本棚の陰から辺りをうかがう。心臓が痛いほどに強く高鳴っていた。頭の中はほとんど真っ白だった。危険であるのか安全であるのか全く判断できなかった。3人の人間が目視できた。ソファーにゆったりと腰かけている者、本をぼんやり眺めている者、魂が抜けたような足取りでふらふらと行ったり来たりを繰り返す者。

不意に彼の肩に何かの感触が乗った。

「ぎゃああああああああああ！！！」

小次郎は断末魔の叫びを上げた。足の力がすくと抜け、ずるずると崩れ落ちた。そして飛び出さんばかりに見開いた片目を自分の

背後に向けた。

背後にはまったく瞳の見えないほど度の強い眼鏡をつけた背が低く痩せて地味な女が立っていた。女はニツコリと落ち着いた微笑みを見せた。彼にとつては長らくお目にかからなかった柔らかい表情だ。なぜか彼にはすぐにそれがサリーだと分かった。

「お疲れ様、コジ。そんなに怯えなくても大丈夫だよ。ここには全く危険はないよ」

柔らかな物腰で女は言った。小次郎の緊張感はどうと抜けて、しばしぐったりとうなだれた。安全が完全に確認できたわけでもないのに、彼はサリーの言葉を決定的に信じた。サリーはそこに立ち止まり、しばし小次郎を見守っていた。

「……なんだここは」

やがて小次郎はそう呟いた。体の芯からの疲れを感じた。サリーはそんな彼を優しく見つめ続けた。その表情を見た小次郎は宙に浮いたようなふわふわとした幸せな感じに包まれた。心地よく、心と体の疲れが癒されていくように思えた。

「ここは良いところよ。住人もみんな穏やかで謙虚な人ばかりよ。誰もあなたを殺そうとはしないわ。ここの人たちはみんなあなたと同じように下の世界を拒否し、あなたと同じように五年間の忍耐を乗り越えた優れた人々なのよ。ここには暖かさがあり、豊富な食料があり、静けさがある。あなたの決まった安全な部屋もあるわ。案内しましょう」

小次郎はよろよろと立ち上がった。暖かい何かに包まれたような心地よい気分だった。彼はサリーの後ろについて夢心地で歩いていた。道々会う人たちはみんな彼に会釈した。そして彼を気遣うように伏し目がちに通り過ぎた。

彼が通された一室は机と椅子とベッドだけのある狭い部屋だが、きちんと清潔にされていた。机の上にはパンの入ったカゴと水差しとコップが置いていた。

「ここで休んでね。長い逃亡で疲れた体を思う存分に休めてよ。」

食料は常に机の上にあるようにしておくからね。好きなだけ食べなさいね」

サリーは母親のような態度でニツコリと微笑んだ。

「おい……この悪魔め。今度は何を企んでいるんだ」

ベッドに倒れこみ早くもとうとうとしながらも小次郎はぼんやりとそう訊ねた。

「うふふふ、心配しないで、ここからは静かな世界よ。静かな…

…ね。うふふふ」

彼女はそう答えて出て行った。一人取り残された彼はしばらく考え込み、完全を確認できたわけではないが、それでも疲れ果てた体を休めるために、思い切ってベッドに潜り込み眠った。なるようになるばいい。そう覚悟を決めた。彼はそれから死んだように延々と眠った。

22・小次郎の悪夢

真つ暗闇の中、少女が一人しくくと泣いていた。

「どうしたの？なぜ泣いてるの？」

小次郎は訊ねた。

「お父ちゃんが死んだの」

少女は涙いっぱい目の目を見開いて小次郎をみつめた。

「そうか、可哀想にね」

「殺されたの」

「そうなんだ……」

少女の体がみるみると成長してきた。色気のある妙齡の女性になった。

「背中 of 皮を剥がれたの……」

「……」

向こうから泣き叫ぶ中年の女性が走ってきた。

「どうしたんですか？」

小次郎は訊ねた。

「主人が死んだんです！」

中年女性はヒステリックに叫んだ。

「私の主人は素晴らしい人でした。少し喧嘩つばやいところもあったし、すぐに他の人と殺し合いまでもするような人でしたが、家族にはとても優しくったのです。家族のためには何でもしてくれる人でした。私は主人を心から愛していました。そして主人は色々な人に心から愛されていました」

「そうですか、残念です」

「殺されたのです。よそ者から殺されたのです。どこの馬の骨とも分からない若造から殺されました。めっためったに胸を鍬で刺さ

れたのです。私たちを見下したような、私たちの仲間には絶対に入らないという傲慢な態度のよそ者に殺されたのです。よそ者は笑っていました。笑って主人を殺しました。皆から愛されていた主人を面白がって殺しました」

「……」

小次郎が中年女性から目を離すといつの間にか絶望した顔つきの老人がいた。老人は何か言いたそうに小次郎を見つめていた。

「何か用ですか？」

「孫がなあ、死んでしまったよ」

「そうですか」

「殺されたんだよ」

「……」

「よそ者が来てな。おれたちを虫けらのように思っているような目つきをしたよそ者でなあ。そのよそ者が子供達をそのかして、わしどもを苦しめたのじゃ。わしらなんか人間だとも思っておらないような傲慢な若者でなあ。自分だけ特別だと思っているんじゃない。体力のある若者でなあ。暴力でわしらを苦しめた。あげくの果てに、わしらの村の大事な子供たちを10人並べてなあ。ヘラヘラ笑いながら片っ端から首を切ってしまいおった。わしの孫もその中にいた。虫けらか何かのようによそ者に殺された」

「……」

次から次へと泣いている者、絶望している者、悲しんでいるものが、小次郎の前に現れた。そして彼に言葉をかけた……

【パァーン！】

火薬が爆発したような音で小次郎は目を覚ました。彼の頬には涙が流れていた。夢の内容は覚えていなかった。非常に哀しい、そして恐ろしい夢であったような気がした。彼はしばらくぼんやりとしていた。

『今の音はなんだったのだろうか？』

やがて彼はそう考えた。そしてじつと耳を澄ませた。いつまでも何も聞こえてこない。食欲は全く無かった。彼はベッドから出て、机の前の椅子に座った。そしてぼんやりと何ともなしに考え事をしていた。ふと気になって、机の引き出しを開けた。そこには拳銃のようなものがあつた。壁に向かって引き金を引いてみた。

【パン！】

爆発音が鳴り響き、壁に穴が開いた。

「ああ、これが……」

小次郎は納得した。

23・行ったり来たりの小次郎

二階の外壁は一面がガラス張りだった。そこから外を見渡せた。一階の風景がはるか下に見えた。そこから見える人間の大きさはホコリの一粒のように小さかった。小次郎はずっと外を眺めていた。やがて彼はきびすを返し、自分の部屋へと向かった。そして机の引き出しを開け、拳銃を手についた。そして長い間拳銃を見つめていた。

殺人の記憶が前世の出来事のようにぼんやりと浮かんできた。10人以上を並べて、片っ端からその首を切り落とした。生きたままの人間の皮を剥いだ。縛り上げた人間に油をかけ、火だるまにした。全身の骨をへし折って崖から突き落としたこともあった。自らこの手で。残酷さを示し、支配を強めるために。そしてこんどは彼等から同じような残酷な処刑をされるのを怯え、5年間逃げ回った。

彼は体を回復させ、安らぎを取り戻した今、すべき事は我が身の罪を精算させるため、我が人生の幕をおろすこと以外に考えられなかった。いやそれでも全然足りない位だ。己一人を己の手で処刑したくらいで、この罪が精算されるわけではない。ではどうすべきなのか。とにかくこのまま己の罪を無かったようにして安穩と暮らすのは正しくないように思った。ではどうすべきなのだろうか。

小次郎は拳銃を引き出しに戻し、部屋を出た。本棚から適当に本を取り、窓際に備えてあるソファの一本に深くと座り込んで本をぼんやりと眺めた。本を読むことは久しぶりだった。一階には本も学校もなかった。ただひたすら生存の戦いのみがあったように思う。小次郎は我知らずに本を貪り読んでいた。そもそも彼は読書が好きで、な質ではない。こんなにも意欲的に読書をしたのは初めてだった。

やがて彼は立ち上がった。そしてまた自分の部屋に戻り机の引き

出しを開けた。そしてやはり拳銃を取り出した。机の上にあるパンは未だ一度も口にしていなかった。とにかく死なねばならない。このまま何もしていなかったように生きていくべきではない。そしてもうこのままではこれ以上生きていく氣にどうしてもなれない。こははつきりとケリをつけておくべき問題だと思える。己の殺人行為。そのすべてが止むを得ない正当防衛のものであれば良かった。しかし彼は確かにそれ以外の殺人も行った。ただ女たちに己の強さを自慢するための殺人もすれば、単に暇つぶしのための必要以上に残酷な処刑も幾度も行った。殺し方を工夫する事が楽しくて仕方のない時期さえあった。あれは本来の自分ではなかった。本当は自分はあるな事をする人間ではない。あの時期は正常ではなかったのだ。魔物か何かに取り付かれていたのだ。

小次郎はやがて自らのこめかみに拳銃口を当てた。

では聞くが、もう二度とあんな事をしないと誓えるか？いや、誓えない。同じ様な状況になればまた同じような事をするのではないか。残虐な殺人者。それが実は自分の正体なのではないのか。あれが自分の本質ではなかったか。

小次郎は拳銃をおろし、再び引き出しにしまった。そして部屋を出た。確信が欲しかった。死ぬべきだという確信が。そしてそれは今にも訪れるような気がしていた。今すぐにでも死ぬべきだという確信が訪れ、迷いも無く拳銃の引き金が引ける瞬間が訪れるような気がした。小次郎はただその瞬間をひたすら待っていた。パンは一口も口にしていない。水ばかりをガブガブ飲んでいた。食欲がまったく無かった。

小次郎は図書館のような二階の室内をひたすらぶらぶらと歩き始めた。巨大な図書館だった。そして極めてシンプルな作りだった。室内の中央部にたくさんの部屋がある。そしてその中央部を取り囲むように本棚が規則正しく並んでいた。本棚の高さは3メートルくらいであった。すべての本棚は同じ高さに見えた。そして本棚と本棚の間のスペースは縦も横もすべて揃っていた。部屋から出て、本

棚と本棚の間を１キロメートルくらいだろうか。ずっと進むとようやく室内の外壁の窓にたどり着くことが出来た。室内は円形状に出来ているようだった。極めて巨大な図書館だった。しかし作りがシンプルなために迷う事はなかった。小次郎はわざわざ窓際まで歩き、やはり外を眺めていた。そしてやがて本棚から適当に本を抜き取り、ソファーに座ってぼんやりと眺めた。食欲は全く無く、生きる気力も出てこない。生きる屍のように思えた。もう何もかもが嫌になっていた。そして再び彼は立ち上がり、部屋へと戻る。そしてまた部屋を出る。そんな事を延々と繰り返し返していた。

24・読書三昧

「……殺されたんです。舌を引き抜かれ、目玉をえぐり出され、犬に食わせていました。情け容赦ない傲慢な若者に殺されたんです。われわれの事を人間とっていいなのでしょう。興味本位で平気で殺人をする異常なよそ者に殺されたんです。おじいさんは立派な人でした。その世界で精一杯頑張って私たちの一族を守ってきたのです。みんなが愛していました。尊敬していました。傲慢でヘラヘラとしたよそ者に殺されたんです。犬に食わせたのです……」

小次郎はうめき、齒を食いしばったまま目を覚ました。汗が大量に吹き出て、真つ青な顔色だった。彼は掛け布団を壁に投げつけて机の椅子へと移動した。そしてががつとパンを食べ始めた。そしてごくごくと水を飲んだ。そこにあるぶんすべてを強引に口に突っ込んだ。無理やり水を全部飲み干した。

そして彼は頭を抱え、長い間うずくまっていた。涙がとめどなく流れ、床にポタポタと落ちた。やがて小次郎はふらふらとした足取りで部屋を出て、巨大な共同トイレで用を足した。何人か人とすれ違ったが、お互いまったく目を合わせなかった。洗面所で顔を洗い、上着で水を拭いた。そして鏡を見た。醜い顔だった。片目で潰れた鼻、何から何まで醜かった。この世に存在してはいけない、人の目には触れてはいけない人間の顔に見えた。小次郎はコソコソとトイレを後にした。

そのあと彼は魂が抜けたようなフラフラとした足取りで本棚を眺め歩いた。もとの世界で見たことのある本がたくさんあった。しかしまったく意味不明な本が圧倒的に多かった。

【ガンジル】 【マチナリエス】 【ジプサー】 【ドリー】 【ポニー】
【ガーシャ】 ……

題名だけだと何のことだが分からない本。おまけにそういう本に限って物凄い厚みであった。小次郎は手にとって広げてみた。小さな文字でびっしりと埋め尽くされていて、とたんに読む気が失せる。彼は元の世界で見たことのある本を選んで手にとって、眺め、読んでいた。しかしこの図書館の八割はそんなタイトルだけではなんのことやらさっぱり分からず、信じ難いほど分厚くて、重くて、そしてページはびっしりと小さな文字で埋め尽くされている本ばかりであった。残りの二割の本は元の世界に存在する本や漫画などであった。おそらくすべての本が揃っていた。莫大な量の本だった。

来る日も来る日も小次郎は本や漫画を読んだ。恐怖やストレスを一時の間だけでも忘れたと思った。本の内容はほとんど頭に入ってこないくせにひたすら読んだ。ひたすら眺めた。そして何もかもを忘れてしまいたいと思った。悪夢は毎日だった。毎日、彼が殺した人間の身内の人間が現れ、彼に切々と訴えた。自分達が心の底から愛していた人が、傲慢で残酷なよそ者からむごい殺され方をしたという内容だった。

この日もいつものように悪夢で目を覚まし、がつがつと食料を口に詰め込み、巨大な共同トイレで用を足した。そしていつものように本棚を眺め歩いた。

ふいに小次郎の足が止まった。一つの本の題名に目がクギ付けになり、心臓は高鳴り、足はガクガクと震えた。その本は恐ろしく重くて分厚い類の本の一つだった。

【小次郎】

彼は手を伸ばし、その本を取り出した。とにかく重くて大きくて分厚い。その本を近くのテーブルに運ぶまでに彼は三回も持ち直した。一旦下におろし、再度、持ち上げるという風であった。ようやく彼はテーブルにその本を置いて、広げてみた。広げると両手を伸ばした位の幅だった。縦は6、70センチはあった。そこにびっしりと小さな文字が埋め尽くされていた。小次郎はかじりつくようにその内容を読んでみた。そして仰天した。

彼の今までの人生がその中に、克明に記されていた。彼が生れ落ちたその日からその本は始まっていた。生れ落ちた彼の体重が何キロであったか、その時どういう感覚を持っていたか。その時その場にいたのは誰であったか、その人たちはどんな感情を持ったかなど。すべて克明に記されていた。小次郎の唇はぶるぶると震えていた。生れ落ちた直後の事など覚えている筈は無い。しかしその内容は確かに生まれたばかりの自分であると、はっきりと理解できた。ぼんやりと思い出しさえした。生まれた直後の自分の記憶をである。

小次郎はとり付かれたようにその本から目を離す事が出来なかった。小さな文字も読みにくさも全く苦にはならなかった。小次郎の365日、24時間、60分、60秒がまったく漏れなく、記されていた。どういう感情であったか。何を見たのか。誰がいたのか。何を聞いたのか。何をにおったのか。何を触ったのか。その時の天気はどうだったのか。湿度はどうだったのか。あらゆる情報が克明に記されていた。その他にも小次郎には全く理解できないような情報も大量に載っていた。構成物質、空気感、存在の有無……？

とにかく小次郎は読み取れるものはすべて読んだ。まったく読み疲れなかった。貪るように読んだ。食事も睡眠も完全に忘れた。かすむ目をゴシゴシこすってまた読んだ。読んで読んで読みまくった。三日四日の後には気絶するように眠った。そして目覚めると再び読んだ。空腹で死にかけた。彼はいまいましてにパンを口に突っ込み食べながら読んだ。どのくらいの長い月日が流れたのか検討もつかなかった。小次郎の本は、小次郎がこの二階に上がって来たところで途切れた。五年間の逃亡生活が終わり、目覚めて、この階に存在した所で途切れていた。それ以降はすべて空白だった。

書籍【小次郎】を読み終わった彼は本を片付ける事も忘れ、放心状態でよろよろと窓際を目指して歩き始めた。窓際に到着した彼はぼんやりとした目つきで窓の外をずっと見ていた。彼は思っていた。今までの人生で自分がどれだけ多くのものを捨ててきたのかを。本

当の自分をどれだけ押し殺してきたのかを。しかしそれらのすべては止むを得ない事でもあった。本来の自分自身をそのまま大切にしていればこんな風にはならなかった。しかしこういう風になるに至る原因がありすぎるほどにあった。すべては定められた道を歩んだだけであるかのようにさえ思えた。子供の頃、奔放で巨大な可能性の塊だった。まわりの人間はそれを押さえつけるばかりだった。彼は幾たびも嫌な思いをし、苦しい思いをし、少しずつ自分の天才を捨てていった。そして彼の両親もこんなにも必死に彼を育てたのかと驚いた。彼により彼の両親は多くの事を考えた。切実に苦しんだ。たくさんの成長をした。そして確かに愛されていた。両親にとっての頑張る目的の大半を彼は占めていた。彼を育てるために両親は切実に強さや賢さを求めていた。そして驚いた事に両親は全く考え方の違う個別な人間だった。小次郎の中では父と母は二人一組だった。しかし実際は、まったくの別物だった。両親はただ彼によつてつながっていた。それ以外の共通点は驚くほど少なかった。

窓際に立ったままの彼の頭の中は嵐のようにさまざまな想念が吹き荒れていた。三日間ほどもずっと立ち尽くしたままだった。まるで石像にでもなったかのようにピクリとも動かなかった。

ようやく動き出したかと思うと今度はフラフラと部屋へと戻り、そのまま布団にもぐりこんでやはり三日間ほど出てこなかった。悪夢は見えていないようだった。

突然彼はバネ仕掛けのような勢いで布団から飛び出した。そして餓死寸前であったかのような勢いでがつと食事を始めた。腹をパンパンに膨らませた彼は巨大トイレへと向かった。起きた後の食事、その後のトイレは彼の習慣になっていた。トイレで用を足した小次郎はゆったりとした足取りで、それでも今度はしっかりとした態度でじつくりと本棚を眺め始めた。分厚くて大きくて重い類の本のコーナーであった。彼はいくつかの知り合いの名前をそこに発見した。その中には彼が殺した人間の本もたくさん見つかった。その中の一つを小次郎は手に取った。最悪の人間だった。こいつだけは

殺した事は正解だと思えた。未だ悪夢にも出てこない人間だった。おそらく誰一人彼を愛してはいなかったのだろう。彼はその人間の本を苦勞してテーブルに運び、熱心に読み始めた。

やはりそうだ。小次郎の場合と同じ事だ。彼は天才だった。天才として巨大な可能性を持っていた。そして莫大な苦しみのため、その天才は完全に抹殺された。彼を愛する者は極めて少なかった。彼の人生には他人の好意がほとんどなかった。その中で彼はもがき苦しみ、必死で生きていた。最悪の人間の内面には単に弱い人間があった。弱い人間が必死で強くなるうとする痛ましい姿があった。

小次郎は次から次へと彼の殺した人間の本を読んだ。みな一様に天才だった。天才が徐々に自分の天才を殺していく過程は人それぞれ違っていた。そしてやはり皆、弱かった。弱い人間だった。弱い人間が頑張って強くなるうとする痛ましい姿があった。哀しい姿があった。愚かで無知で残念な姿だった。すべての人間に甲乙付け難い深い人生の足跡があった。そして一人一人の感覚がこんなにも違っている事に驚いた。表面上は同じような生活であったとしてもその内面生活は全く異なっていた。

小次郎は殺した人間の本を読み、憎んだ人間の本を読んだ。元の世界の人間の本は見つけられなかった。

25・悪夢の中の謝罪

真つ暗闇の中、小次郎はたたずんでいた。これはいつもの夢だな。彼はすぐにそれを悟った。手にたいまつを持った女性があちらからゆっくりと近づいてくる。しくしくと泣いていた。そして小次郎の前に立ち止まり、マジマジと彼を見つめた。そしてぽつりと言った。

「死にました」

小次郎は無言だった。

「殺されました」

やはり小次郎は無言だ。

「残酷なよそ者の若者に土の中に埋められました。あの人と私は若い頃に好きあつて、それから色々喧嘩もしましたが、二人で一緒に解決してきました。子供が生まれ、二人で必死に育てました。この世界でもたくましく生きていけるようにとあの人はまだ子供が幼い頃から体を鍛えてました。私たちの希望の光でした。私たちのすべてでした。その子が傲慢なよそ者に生きたまま土の埋められたのです。主人は激怒しました。あの恐ろしい若者に決闘を申し込みました。あの若者はそれを受け、へらへらと笑いながら自分の自分を大勢寄越して、主人を縛り上げました。そしてやはり生きたまま土に埋めてしまいました」

「申しわけありませんでした」

小次郎は真つ青な顔でそう言つて土下座をした。

「あなたの主人は素晴らしい方でした。あの厳しい世界をたくましく生きておられました。とても堂々となさつて、お子様にも尊敬されていました。その素晴らしい主人と素晴らしいお子様を殺してしまった愚か者は私です。私は心の底から後悔しております。間違

いを犯しました」

そういつて頭を伏せたまま小次郎は涙を流した。それからぞくぞくと小次郎に殺された被害者の身内のものが無言で押し寄せた。一人また一人と増えていき、やがてびっしりと小次郎の周りを埋め尽くした。

「あやまつて済むことか。我々が納得するような償いをしてみせろ」

その中の一人の老人がそう言った。

「どうすれば許してもらせるでしょうか」

小次郎はそう尋ねた。すると辺りに嘲笑の嵐が巻き起こった。後ろからヤジ馬風の男たちが群集を押し寄せて小次郎の前に進み出た。

「それはお前、決まつてるだろ。俺たちの愛する者を手前は殺したのだから今度は手前の愛している者を手前の手で殺して俺たちの前に持つて来いよ。それが筋つてもんだろ。なあみんな」

嘲笑はなお一層高まつた。

「それは出来ません」

小次郎は答えた。

「じゃあ俺たちもお前を許すことはできませんだな」

野次馬はせせら笑つてそう言った。いつまでも決着はつかなかった。真つ暗闇の中、たいまつを持った大群衆はいつまでも一人も立ち去ろうとはしなかった。

「さあ、どうするんだ。どうやって俺たちを納得させるんだ。え？なんだつたら開き直つてみるか？俺たちの身内のもんがくだらない人間だったから、いや、お前流に言えば、俺たちなんか人間というよりも虫けらだから踏み潰すことはあたりまえの事だとも言うてみたらどうだ。そしたら俺たちがこの場でお前にどんなことをするのか分かるだろうな。さあ、言ってみろ。俺たちが屑だから俺たちがゴミだから俺たちを平気で殺すのだと言つて見る。言ってみろ。言ってみろ。言ってみろ」

小次郎は頭を抱え込み、亀のようになった。何も見ず、何も聞くまいとした。しかしいつまでも嘲笑はおさまらなかった。

すると突然、この真つ暗な空間が明るく虹色に照らし出された。群集は慌てふためいたようにもと来た道へ逃げていった。小次郎は依然として亀のように丸まったままだった。

「コジ……」

聞き覚えのある声が彼を呼んだ。サリーの声だった。その姿は図書館の中の眼鏡をかけた地味な女の姿だった。小次郎は恐怖で震える顔を上げた。顔中涙でいっぱいだった。

「コジ、駄目じゃないの。謝つたりしたら。そんな態度では骨の髄までしゃぶられてしまうよ。戦いはまだ続いているのよ。一度戦いを始めるともうそこからは抜けられないの。悪かったごめんなさいではすまないの。もう二度と謝らないで。最後の最後まで戦うの。それが生きるって事なのよ。あなたは生きるの？死ぬの？どうするの？」

深い沈黙がいつまでも続いた。やがて小次郎は言った。

「死ぬ事は正しくない。だから俺は生きる。生きるのか、死ぬのかと言われれば、答えは一つだ。生きる。生き抜く」

小次郎は立ち上がり、決然とした表情でそう言い切った。

「そう、じゃあ、もう答えは出ているわけね。じゃあ行きましようか」

サリーは有無を言わず小次郎の腕を引っつき、恐ろしい力で空に向けて彼を投げ飛ばした。彼は悪夢の中の暗闇の天井に飲み込まれた。

26・三階、カイザーとの問答

三階。

「おい、君、おい！」

小次郎は誰かにゆさぶり起された。目の前には茶色の髭を生やし、黒い長帽子をかぶった立派な身なりの紳士がいた。その手には木のステッキを持ち、ネクタイをしていた。

「目覚めたな、君。拙者の記憶が確かであれば君は小次郎氏ではないのかな。まあそんな事はどうでもいい。とにかく早速君に問う。人間とはいかなるものか？」

紳士はまじまじと小次郎を見つめ、返事を待つ。小次郎がいつまでも答えぬのを見て、話を続けた。

「拙者は解釈する。つまり君は今、意識が朦朧とし、まだ本来の姿ではなく、拙者の投げかけた質問に答える事が困難なようだ。だから拙者の意見を先に披露しよう。その間に君は自分を取り戻し、自分の置かれている状況を少しずつ把握でき、そして拙者が意見を言い終わる頃には少しは君自身の思想を披露することの出来る状態になるにちがいない。さて、人間とは、拙者はこう考える。人間とは使命を持ち、それをはつきりと自覚して、それにそって生きる事なくしては真の満足は決して得られぬ存在であるとは、言ってしまうても間違いではあるまい。そこで問題になるのはどのような使命を持つか、と言うことになるだろう。人間の心の在り方は人それぞれで、なかには悪、人類ならびに地球の環境にとって明らかにマイナスであることに自分の価値を決めつけ、その中で愚か者の様にがむしやりに頑張ると言うことも充分にありえる。そしてそのものは自分の愚か故に必ず後悔をするか、絶望をするか、結局、十分な満足を得られずに至るのだ。そこに人間にとっていかに学問が大事で

あるかがはつきりしておろう。いかに生きるべきか。真の善とはな
のであるか。我が身を真の満足に至らしめる道とは結局なんである
のか。それが君、難しく、我々の議論が決して尽きる事のない難し
いテーマなのだよ。君、君、目覚めたかな。やはり君は小次郎氏で
はなかったかな。拙者にはそう認識されてならないのだが」

小次郎はぼんやりと紳士の話を聞き、はっと我に返った。

「ここはどこです。そしてなぜあなたは私を知ってるのです？」

「こことは？ふむ、ここは一つの空間であるといえる。それは確
かだ。ここに今、君と拙者が存在している。それも本当だ。ふむ、
ご質問の意味が少し分かりかねるが、まあ、よい。ここは一つの空
間であり、君と拙者が存在している。周りを見渡してみられよ。人
がたくさん存在している。馬車もまたしかり。そういう空間である。
この空間は拙者にとつての印象と君にとつての印象は同じではある
まい。ゆえにそれ以上のこの空間に対する情報は君ご自身で認識す
るべく勤めるが宜しかろう。次に拙者が何ゆえに君を知っているの
か。それについては拙者自身の名前を名乗る事でほとんどご理解頂
けるだろう。拙者の名はカイザーである。昔この塔の一階で世界の
王として君臨した経験の持ち主である。君とはその折り、幾たびが
顔を合わせる機会があったように思う。ただその折り、拙者の方は
我が身を守るために四六時中鋼鉄の鎧と兜を見につけていたゆえに
君の方は拙者の素顔を知らないであろう。どうだろう。それですべ
ての説明が終わったのではないだろうか。拙者が君を知り、君が拙
者をご存知でないのはそういう理由からである。ふむ」

小次郎は呆気にとられて紳士の長話を聞いていた。カイザー？こ
のおしゃべりな中年男性が？あの憎しみと嘘と戦いの世界の象徴で
あったような恐怖の存在カイザーがこの人？

「カイザー様ですか？それはそれはお久しぶりです。……ずいぶ
ん私が思っていた印象とはかけ離れたお方でらっしゃいますね。確
かにカイザー様ですか……」

「ふむ、まず一つ指摘しておきたい点がある。拙者の事をここで

カイザー様と呼ぶのは適切な表現ではあるまい。ここではそう、カイザー氏。あるいはカイザー殿。またはカイザーさんなどと呼んで貰わねば適切とはいえない。なぜともうすにここまで来た優秀な我々の間にはもう立場の上も下もなく、すべからず対等の立場にて自らの掴んでいる情報を垣根なくスムーズにお互いに伝え合う事が必要だからじゃ。そして我々にとつてもっとも大事な事は真実にたいする限りない謙虚な態度である。謙虚な人間になることが必要である。ゆえにそういうむやみやたらな尊敬言葉は百害あつて一利なしとなる。拙者はそう考えている。ゆえに適切な呼び方を使っていたきたいものだ。ふむ、それとまだご質問が残つておったな。なぜ拙者が以前の憎しみ世界の王だった頃と印象が変わつてゐるのか。それは君にも覚えがあるだろうに。五年間の逃亡。死者の身内たちの陰湿な攻撃。二階での他者に対する書物の熟読。それらの経験が人間の精神にどれほどの大きな変化をもたらすのかは語らずとも分かることである。そうではないか。小次郎氏よ」

「はあ、おっしゃるとおりですね。カイザー……氏」

そう言つて小次郎は辺りを見回した。そこは昔の西部劇に出てくるような光景だった。ガンマンの代わりに黒長帽子をかぶった紳士達がうろつろつとしている。馬車はひっきりなしに通過ぎ、ステッキを持った紳士たちがそこら中で議論をしている。物凄い活気に溢れていた。二階の巨大図書館の静けさに慣れきつた小次郎には戦場の真つ只中にいきなり飛び込んでしまったような衝撃があつた。小次郎は急に猛烈な空腹感に襲われた。

「お会いできて光栄でした。時にカイザー氏。ここらに食事の出来るところはありますかしょうか」

「食事、食事とな。うん、それは致し方あるまいな。本来ならばまだ我々の会話は始まつたばかりであるし、拙者は先ほど食事はすませたばかりであるし、ふむ。まあこの先いくらでも語り合う機会もあるであらうからよしといったそう。ほれ、小次郎殿、あちらを見られよ。木の扉が開けっ放しになつてゐるあそこじゃ。あの建物で

食事ができる。女どもに言いつけるがよい。まあともあれ、拙者もここには来たばかりでな。知った顔に出会えてとても愉快であった。ぜひ今度、きちんとお互いの思想や感情、経験などを情報交換いたそう。そして一日も早く真理に到達しようではないか。ではさらばだ。拙者は向こうの議論に加わることに致す」

そついうとカイザーはさつさと人ごみの向こうに行つてしまい、すぐに小次郎の視界からは見えなくなつた。

27・店での食事

木造の店内に入るとむっとする熱気に包まれた。ここもまた議論の大洪水であった。小次郎はしばし立ち尽くした後、ゆっくりと開いている一番端のカウンター席に腰を下ろした。辺りを見回すと店員らしき女たちが忙しそうに料理を運んだり、作ったり、食器を片付けたりしていた。小次郎はその中の誰かが彼に気付くのを辛抱強く待っていたが、まるでわざとであるかのように誰一人彼の方には目を向けない。空腹は耐えがたかった。しかたなく小次郎は大きく手を振って、カウンターの中で洗い物をしているボ口を着て瘦せた貧相な女に声をかけた。

「あの、すみません。食事をしたいのですが」

女は振り返りニヤリと笑った。彼はその女がサリーだと気付いた。

「やあ、死に損ない。元気？」

「サリー……一体今度はなんだよ。どうなってんだよ一体」

小次郎は叫んだ。

「まあまあそれよりも一杯やって、ソーセージでも食いなよ。ちよつとお待ちになってね」

サリーは水道の蛇口を閉め、カウンターの奥の部屋へと消えた。一分もしないうちに今度は別の出入り口から片手に巨大なビールのジョッキ、もう一方の手にはごついソーセージばかりが山盛りに積まれている大皿を頭の上に突き上げるようにして運んできた。そして小次郎の前に流れるような器用な手つきで大皿とビールを置いた。

「さあ、食べなさい。がつがつと食べなさい」

そういつて貧相な女は小次郎の横の席に座り込んだ。

「ジェリー！なにやってんだよこの忙しいのに！」

ちょうど奥の階段から降りてきて店内を見回していた中年女性が雷のような怒声をサリーに向かって投げはなつた。

「うるせー、ババア！わつしを誰だと思ってるの！ぶつころされてーのかー！」

サリーは口汚くそうやりかえした。この店の主人なのだろう、中年女性は忌々しげにサリーをにらみつけたがそれ以上は何も言わなかった。

「しょうもないババアだよ、まったく。ぶくぶく太っちゃって、てかてかの顔しちゃって。あんなに不細工なのによく人前に出て偉そうに出来るよ。馬鹿じゃないの」

サリーはプリプリと怒っていた。そんなサリーを横目で眺めながら小次郎はビールをぐいぐいと飲み、ソーセージをがつと食べた。非常に旨かった。やがてサリーは小次郎の観察に気付いて顔を真っ赤にしてゴホンと一つ咳払いをした。

「ええと、なんでしたっけね。おほほほ。そうそう、この世界についてご説明いたしますわね。あーめんどくせ。あのねー。うんとねー。つまりこの階はね。思想の世界なのよ。みんなが、人間はどう生きるべきかを探すのに必死なの。まったく働きもせずにああでもない、こうでもないといい気なもんだよ。ここでは女だけがまともで、生活をささえているのさ。それなのに女はとことん蔑まれているんだ。へんてこなところだけど、まあ勉強にはなるんじゃないの。それとそうね。この世界には極めて優秀な医者は腐るほどにいるからその目と鼻と全身のブツブツは治してもらいなさい。見苦しいったらありやしない。すっかり綺麗に元通りにしてもらふのよ。分かった？」

小次郎はらくらくとソーセージを食べ終わり、その皿をぺろぺろと舐めた。そしてビールを飲み干し大きなゲップを一つ吐いた。そして言った。

「どこで？」

「そんな事は女中にもききなさい。これから屋敷に案内してあげるから。そういうこまごました事はわっしのような大人物にきくことじゃないでしょ！ほんとどいつもこいつも」

ボロを着た貧相な女は小次郎の首の後ろの服を引っつかみ強引に彼を立ち上がらせた。

「おいでよ。今すぐ連れて行つてあげるから。あなたの落ち着き場所にね」

「ちよつと待てよ。食つたばかりじゃないか。せつかちだな。いいのかよ。仕事中だろう？」

「あはははは、あんた私を誰だと思つてんの？」

サリーは無理やり立ち上がらせた小次郎をそのまま出口の方へぼんぼんと小突き続けながらそう言つて笑つた。

「こら、ジェリー！どこに行こうつてのさ。この忙しいのに！」

「やかましいババア！今日はわっしはもう上がる。今からお花畑にでも行つてのんびりするのさ。文句があるならいつでもかかってきなさいよ！」

小次郎とサリーは店を出て、往来を足早に歩き始めた。サリーはどんどんと前に行く。小次郎はついていくのが精一杯であつた。まだ色々と聞きたい事はある。しかしサリーは忙しくてたまらない、一秒の時間も無駄にはしたくないといった態度で小次郎の足取りの遅さを睨みつけてばかりいた。

やがて二人は大きな鉄門にたどり着いた。その守衛をやっているらしき中年女性にサリーは軽く頷いてみせた。中年女性も頷き返した。鉄門をくぐると広々とした庭が広がっていた。その向こうに立派な屋敷があつた。

屋敷の前の門に到着するとサリーは備え付けてあつた鐘を紐を引きちぎるような勢いで鳴らし始めた。

「じゃあ、わっしはもう帰るわね。ここの主人にはもう話しをつけてあるからね。とりあえずのんびりとするといいわ。じゃあね」
そついうとサリーは逃げるような勢いでふいに走り去つていった。

28・屋敷到着、奇妙な再会

しばらく待っているとやがて屋敷のドアが開き、中年女性が胡散臭げに小次郎を眺め回した。

「どうも、わたくし橋本小次郎と申すものですが……」
小次郎はしどろもどろに自己紹介した。

「ああ、ジェリーから聞いてるよ。ついておいで」

女中は雷のような迫力のある声でそう言った。屋敷の中はやはり活気に溢れていた。天井が高く巨大なシャンデリアがキラキラと輝いていた。奥には螺旋の階段があり、そこらじゅうにテーブルやソファが並べられている。細長い窓もいくつもあり、窓の外を眺めじつとパイプをくゆらしている紳士も見られた。室内は立派な身なりの紳士たちでごったがえしていた。皆、一人たたずむ者は自らの思考に、語り合うものはその話題に夢中になっており、小次郎のほうには誰一人目をくれようとしなかった。小次郎は女中に促されるままに奥の螺旋階段を上がり、そのさらに奥へと案内された。

「じゃあ、こちらの部屋をお使いください。何かありましたらこの鐘を鳴らしてください。それでは」

迫力のある大声で吐き捨てるようにそういうと女中は出て行った。部屋の中は広々としていて、外に通じる長細い窓が二つついていた。そしてテーブル一つにソファ四つの一組が二つとテーブル一つに長いソファ二つのセットが一組用意されていた。一番奥には立派なベッドが置かれていた。小次郎はふらふらとベッドのほうへ向かいすぐに眠ろうと思った。なぜかとても疲れきっていた。

ちょうどベッドに倒れ込んだとき、ドアがノックされる音がした。小次郎は勢いをつけてなんとか立ち上がり、ふらふらとした足取りで歩きドアを開けた。そこにはやはり八の字の口ひげを生やし茶色の髪の毛を五分わけに丁寧な撫で付けた立派な風貌の紳士が立っていた。小次郎はその紳士を見てどこかで見た顔だなと思った。

「どうも小次郎殿。お久しぶりです。その節はお世話になりました。小生がこの屋敷の主人、ドン・ホセ・ピートでございます」

主人は胸を張ってそう自己紹介した。どうも小次郎にはぴんときなかつた。彼はしばらくぼんやりとわれを忘れて主人の顔を見つめていた。

「あ、どうもこんにちは。橋本小次郎と申します。どうぞ、よろしく」

我に返った小次郎は慌ててそう挨拶をかえした。

「わっはっは。ようこそ、我が屋敷へ。お互い見違えますなあ。今、小生はこちらの世界で医者としての活動もしております。な。小次郎殿のそのブツブツと目と鼻は小生が綺麗さっぱり治して差し上げましょう。まあその件についてはいずれ後日、改めて……何はともあれ、ずいぶんお疲れのようだ。今回は長居いたしますまい。ではごゆっくりとお休みください。ではまた」

主人は手を差し出し、小次郎は力なくその手を握り返した。主人は立ち去った。

『ピート？ピートは全身傷だらけの荒くれ者だ。あんなのっぺりとした綺麗で品の良い顔立ちである筈はない。だがまあ確かに目つきや表情の動きはピートそっくりだったな。まったく何がなんだか』

小次郎はぼんやりと呟きながら引き込まれるようにベッドの方へと向かい、倒れこみ、そのまま死んだような長い眠りについた。

29・悪夢の中の問答

「殺されました。大切な人でした。主人と帰るといつも場がぱつと明るくなりました。とても陽気で優しい人でした。とても勇敢な人で傲慢なよそ者がのさばりだしてみんなが恐れて逆らえなかったのですが、うちの主人は戦いを挑みました。グループを作って傲慢なよそ者を退治しに出かけました。それで返り討ちに合いました。傲慢なよそ者はそのグループの全員の首を両手に持って村にやってきました。そして村の中央の広場でその後、半年も首をさらしました。どろどろに崩れていくその頭を皆に見せ付けました。片付けるものには同じ目にあわせると脅していました。私たちは最愛のあの人が無残な姿を見せ付けられました」

何人目であろうか。やはり次から次へと小次郎が殺した人間の身内の者が次から次へと現れた。そして彼に恨み言を述べ続けた。まったく身内の人間のいう事はもつともなように思えた。小次郎自身も理解していた。自分が軽はずみに殺してしまった人たちが本当は、愛すべき人たちであったことははつきりと理解できた。

「でも聞いてください。やらないとやられていたのはこっちだったのです」

黙っている事に耐えかねたように小次郎は叫んだ。するとやはり次から次へと真つ黒な姿の群集が押し寄せて来た。

「お前は笑っていたじゃないか。面白半分だったじゃないか。そこまでする必要がどこにあったというのか」

群集から怒声が飛んだ。

「面白半分でやったこともありました。しかしやらなければやられる事もまた事実でした。私はあなた方に残酷で恐ろしい人間であると思われようと思いました。そのために必要なだけ残酷な行為をし

ました。すべてはあなた達に恐れられ、自分の身を守るためでした。私はあなた達が恐ろしかった。自分の身を守る事に必死だった。ただ必死だったのです。あの世界はやらなければやられる。そういう世界であつたはずです。私は私が殺した人たちの事を知っています。二階の図書館の世界で読んだのです。みなかけがえの無いこの世にたつた一人の人たちであることははっきりと読み取りました。しかしです。その人たちもやはり殺人行為は幾たびも行っていました。時には軽はずみな気持ちで人を傷つけていました。私も確かに悪かった。でも誰もが私のようになる可能性はあつたのです。私一人の責任では有りません。私一人を責めたところで解決しない根強い問題なのです」

小次郎は両手を振り回して大声でそう主張した。群集の中から老人が進み出た。そして言った。

「自分がやったことの償いはどうするつもりだ。償いをしないつもりか。理屈はいい。償いをしないつもりなのかどうかをはっきりいたせ。どうなんだ？」

「そういうあなたは誰一人殺しては来なかつたのですか？誰一人傷つけなかつたのですか？あなたに私を裁く権利があるのですか？あの世界は完全な世界であつたとお思いですか？」

「わしの話をしておるのではない。お前が我々が納得する形での償いをするつもりなのかどうかを問うているのだ。質問をそらすな」

「質問をそらしてはいません。逆に私があなたに質問をしただけです。私だつて質問くらいしてもいいでしょう？ではもう一度伺います。もしあなたが私の立場であればあなたはどんな償いをするおつもりですか」

「くだらんことを聞くな。わしはお前のような傲慢な人間じゃない。話をそらすな」

小次郎はしばし考え込んだ。群集からは数々の怒声が上がった。

「納得のいく返答をしろ！殺人の責任を取れ。我々を納得させる」

「はつきり言おう。あなた方は卑怯だ。こんなに大勢で押し寄せ、て一方的に私を非難している。卑劣な行為だ。話があるのなら代表者を選びたまえ。その代表者とお互いが納得のいくまでとことん話しあえばいいのだ。あなたがた全員を納得させることなどどだいに不可能だ。あなたの方がやっていることは、私があなたの方の身内の人間にやったことと本質的に変わりはない。人の罪を責めるのなら、責める人間にもきちんとした態度が求められるべきだ。立ち去りたまえ。文句があるなら代表者を立てたまえ。私は逃げもかくれもない。本当に私の行為を責める資格のある何の罪もない、なんのやましい事もない人間がいるならばその人間と一対一で喋らせる。大勢で私一人を痛めつけるようなやり方は卑劣な行為だ！」

群集は静まり返った。

「大言吐きやがったな。もうすっかり先生様のおつもりだ！」

群集の野次馬がはやしたてた。

「我々は被害者だ。お前に殺された人間のな。我々にはお前を殺す権利がある。何が代表者だ。ふざけた理屈を抜かすな！」

「お前に殺す権利があつたのか？そんなに偉そうな理屈を言う資格があるのか？二度とふざけたことを言うな！」

「私には殺す権利はなかった。私は確かに間違いを犯した。その罪を償う必要はあるだろう。このさき生きていくならば罪を償うことは確かに必要だ。しかしそれは私個人の問題だ。この中で私を責めるだけの権利を持っている完全に身が潔白な人間だけが残ればいい。それ以外の人間は今すぐこの場から立ち去れ。一対一で話が出来ないような卑劣な人間は今すぐに立ち去れ。あなたがたにそう一方的に罪に対して責められる筋合いはない。誰もあなたがたを裁判官にしてはいない。あなたがたに人を裁く資格はない」

「なんだとお。この野郎。ぶっ殺されてえのか！お前は俺たちの身内を殺したんだぞ……」

小次郎は目覚めた。滝の様な汗だった。身体中がワナワナと震えていた。恐ろしい夢だった。しかし仕方の無いことだ。一度やり始めた戦いはやめられない。戦い続けるしかない。逃げても解決しない。戦い続けるしかないのだ。しかし戦いといっても一階の憎しみの世界でやっていったような戦いではない。お互いが破滅するような戦いではない。建設的な戦いをするべきなのだ。悪夢の住人たちとも徹底的に語り合うしかないのだ。真実を語り続けるしかないのだ。間違いは誰もが認めるべきだ。責める者も責められる者も筋を通した態度でいるべきなのだ。そうでないと問題は解決しないのだ。

布団から飛び出した小次郎は真つ暗闇の中、部屋中を行ったり来たりして、必死の思いで考え込んでいた。出口を探していた。適切な態度、正しい態度を模索していた。

30. ピートの独白

しばらく悩み抜いたが結局は何一つ、良い考えは浮かばなかった。これからも眠るたびにあのような悪夢に会うのかと思うと非常に気が重かった。時は深夜であった。小次郎はとりあえず顔でも洗ってこようと思って部屋を出た。真つ暗な廊下に出て、螺旋階段を下った。月明かりで窓際が薄く光っていた。その窓際に一人の紳士が幽霊のようにたたずんでいた。小次郎は一瞬ぎくりとした。そしてその紳士と目と目が合った。

「目覚められましたか。よく眠れましたかな」

ピートは尋ねた。

「ええ、おかげさまで」

力なく小次郎は答えた。ピートはその顔をまっすぐに見つめていた。

「すみません、洗顔でもしたいのですが、どちらに行けばよいでしょうか？」

小次郎はそう尋ねた。するとピートは彼をシャワールームまで案内してくれた。

「そこにあるものを何か適当にお召しになってください。明日はお召し物を何着かお届けします。お気に召されたら身につけなさるがよろしい」

ピートはそういつて、洗面所に何着か掛かっているバスローブを指差した。ピートは出て行った。小次郎は上から下までボロを抜き捨ててカゴに入れ、水のシャワーを頭から浴びた。体が冷え切ってしまうまでそのままじっとしていた。やがてたたんで重ねてあるバスタオルのひとつを手に取り、丁寧な体の隅々を拭いた。そして真っ白の清潔なバスローブを着て、大広間の方へ戻った。ピートはソ

ファーに座ってパイプをくゆらし、ぼんやりとした表情で小次郎を見つめた。

「どうですか。小次郎殿。こちらで一服しませんか」

戻ってきた小次郎にピートはそう声をかけた。小次郎は一つ頷いて窓際のソファーに座っているピートの隣りに腰を下ろした。二人は月の光に包まれていた。ソファーの前には小さなテーブルがあり、その上には葉巻や灰皿、マッチや水差し、コップなどが乗っていた。ピートの薦めに応じて小次郎は葉巻を手に取り、火をつけてくゆらした。

「夢を見ましたか……」

ピートは尋ねた。

「ええ、いつも見ます。苦しんでいますよ」
そういつて小次郎は苦笑いした。

「あの夢はなかなか消えませんが。彼等は我々の確信のある言葉を聞きたがっておるのです。強い態度を見たがっておるのです。嘘偽りでは決して納得してくれません。苦しんで苦しんで苦しみ抜いて彼らが納得する言葉と態度を見つけないのでしょうか……」

ピートはぼんやりと呟いた。

「ピート殿はもう悪夢を見ませんか」

小次郎は尋ねた。ピートは力無く笑った。そして震える声で言った。

「小生はなるべく寝ないようにしています。あの夢から小生は抜け出せずにいる。ここに来て小生は三年くらいになります。最初はなんとか彼らを言いくるめてしまおうと頑張っていたのですが、どうしてもうまくはいかないようだ。小生は嘘偽りばかりを言っていて生きてきた。その癖はなかなか治りません。ついつい適当な事を言っていて彼らを怒らせてしまう。彼らが本気で怒ってしまうと夢とはいえ、小生を殺す力を持っています。実際にあの夢のために気が狂って精神の闇に陥ってしまった人間もたくさんいるのですよ」

小次郎は黙って耳を傾けていた。しばしの沈黙が訪れた。やがて小次郎は尋ねた。

「ピート殿はいつの間にこちらにいらしたのですか。私はてっきり私が失踪した後、あなたがあの一階の世界の王に君臨するのだとばかり思っていました。それも長い間。あなたはとても賢い若者だった」

それを聞いてピートはやはり力無く笑った。そして言った。

「あの後、あなたがいなくなってから、小生は次のリーダーを大急ぎで探したものです。小生はね。実はあの世界は二周目なのです。一度あの世界で死んでおるのです。ご存じないでしょうね。あの世界で死んだものはあの世界で再びよみがえるのですよ。小生は一度死に、そして再びよみがえった。赤ん坊としてよみがえった。前世とっていいのでしょうか。前世の記憶は完全に消されます。しかし無意識の世界ではきちんと知識として蓄積されるのですよ。そして再び使い魔の奴が現れた時にすべてを思い出します。この世界に来る前の記憶まですべて。小生は若き医学生でした。そして一生懸命医学の勉強をしました。そして実習の時、小生は独自の医療を試しました。そのため患者は死にました。そして小生の医学の道はたたれたのですよ。そしてただ酒に溺れる日々を送った。その中で使い魔と出会い、この世界に引きずりこまれました。医学生であった頃の小生は本当に何をしてみずば抜けた才能を見せる恵まれた人間でした。勉強も運動もずば抜けておりました。この世界に入った時も小生はリーダーとしてこの世界を統一しようと考え、行動しました。その結果、一人の非常に腕の立つ剣士によって暗殺されました。そして小生はよみがえった。赤児として。すべての記憶を失って。しかし無意識での知識は残っている。その本能が今度は小生をNO1の位置に付く事を避ける生き方を選ばせたのです。常にNO2でいること。そして常に冷静でいること。常に他人の感情や考えを恐れること。そういうやり方を無意識で選んでいたのです。そしてそう、小生はあなたよりも三年早くこの階にたどり着いた。そ

の理由はこういうことです。小生は赤児の頃からすでに平和を望んでいました。その前世の頃から望んでいました。そして小生は小生なりに頑張ってきました。あの世界の人間の感情を理解しようとずつとつとめてきた。その結果、小生は赤児になり、そのまま成長し、完全にあの世界の住人となりました。それはすべて平和を実現するためです。彼らの事を理解して、そして彼らを導いて、つまらない争いのない平和な世界にしようとしていました。すべてはその努力だったのです。その結果、小生の働きは小次郎殿よりも先に何者かに評価されました。おそらく小次郎殿が我々から逃げ回っていた頃に小生の前に使い魔が現れました。そして二階の図書館の世界に連れて行ってくれました。そこで小生は己の知らない己自身の歴史を本によって知り、触れ合つて来た人々についても詳しく知り、そして元の世界よりもはるかに発達した医学の本も読み漁りました。いくたびかトイレで小次郎殿ともすれ違ったのですよ。お気づきになりませんでしたね。そして小生はこれらの世界に来ることになった。もともと死ぬ意志など持っておりませんでした。すべては平和の実現のためにおこなっていたことだったのです。もっともそれは無意識での意思ではあったのですが。とにかく小生は図書館で書物を読み漁り、充分に読み終え、こちらに参ったのです。しかし未だにある悪夢からは抜け出せずにいる。小生にはまだ何かが足りないのでしょう。それはなんなのでしょうか。一体それは……」

ピートはふいに黙り込んだ。まるで固まってしまったかのようにピクリとも動かなくなった。小次郎はピートが眠ってしまったのかと思った。彼が手に持ったパイプの火はやがて消えた。小次郎は長い間、ピートの姿を見つめていた。まだ色々と尋ねたい事は残っていた。しかしいつまでたってもピートは動き出さなかった。小次郎はやがて立ち上がり自分の部屋へと戻っていった。

31・三階の女傑

小次郎はこの世界にとどまり続けた。夜はいつも悪夢にうなされた。ピートやカイザー、その他の論客たちと積極的に意見を交換した。彼の潰れた片目と鼻はこの世界の医師の手で作られたピコテクノロジーマシーンで綺麗さっぱり元通りになった。ムカデやクモに齧られた事が原因であるらしい皮膚のブツブツは処方された薬を一ヶ月ほど飲むことで嘘のようにまっさらに無くなってしまった。

真摯に語り合っでは食べ、ひたすら考え込んだ。いかにいきるべきか。何をすべきか。その事を常に考え、考えが煮詰まると幾たびも語り合った。そして睡魔は毎回訪れてその度に小次郎は我知らず眠りに落ちた。そして悪夢の住人たちとの議論を重ねた。ピートが眠らずに済む薬を処方してくれたが小次郎はそれを飲まない事にしていた。真っ向から自分に突きつけられた問題と向き合いたいと考えたのだ。

しかし、どうしても悪夢の住人たちとは折り合いが付かなかった。そしていつしか小次郎は悪夢の只中で言葉を発する事を一切やめてしまった。ただひたすら彼らの言い分を黙々と聞いているのみであった。特にこちらから返答をしなければ彼等は一人ずつ彼の前に現れ、長々と愚痴をこぼして涙を流して、時に怒り狂って、そしてやがて闇の中に去っていった。そして再び次の一人が訪れて、同じ様に彼の前で自分の無念の思いを吐露しにくるのだった。そして小次郎は気付いた。夢の住人は結局、彼に危害を加える事は出来ないことを。悪夢の中での支配者はあくまで小次郎自身であることを。彼が何かを確認したくて、訪れる人に声をかけるととたんに大勢の住人が押し寄せてくる。その手には鍬やナイフが光っている。しかしある一定の距離間以内には小次郎には近づけないようだった。大勢

が押し寄せた場合でもひたすら小次郎が沈黙を守っていればやがて一人また一人と立ち去ってゆく。そしてまたただの一人を残すのみであった。小次郎は彼らを哀れに思った。結局彼等は無力だ。口先だけで何も出来ない。自分の愛する者を殺された事の復讐は彼らには出来ないのだ。

ある日、小次郎は地面に目を落としながらひたすら街中を歩き回っていた。あいかわらず通りの至るところで議論議論の大洪水である。小次郎は特に発言はせず、立ち止まっては聞き耳を立て、また歩き出して、また別のグループの議論に聞き耳を立てなどしていた。

「ちよつと、小次郎じゃないの。何してるの。こんな所で？どうしたの？」

ふいに小次郎は元気な若い女性に声をかけられた。そして彼は振り返り、その顔をマジマジと見つめた。どこかで見たような顔だったが、どうにも思い出せなかった。しかし確かに小次郎の名を呼んだのは間違いなかった。

「私の名は確かに小次郎と申しますが、あなたはどなたでしょうか？」

そう声を掛けられた元気な女性は仰天して見せた。

「こんな美人を忘れたの？この引き締まったボディ。美しいフェイス。もつとよく見てごらんなさい。どう思いだした。あのめくるめく夜を！」

女性は叫んだ。小次郎は疑わしげに目を細めてその顔を体を眺めた。確かにどこかで見た覚えがある。しかしどうしてもそれが誰なのか見当が付かなかった。

「失礼ですが、どなたでしょうか。どこかでお見受けした気はするのですが、思い出すことができません」

小次郎は素直にそう言った。すると女性の眉と目の端がキュッと上がった。顔色はみるみると真っ赤になった。そして必死になって

自分の怒りを自制している姿が見受けられた。それを見て小次郎はその女性が誰であったかすぐに気付いた。そして愕然とした。それはまた別人のような姿であった。その小次郎の表情の変化をいち早く見て取って女性はニヤリとした。

「気付いたようだね。でさあ、あたしメラニーとかいうおばさんの店で働くようにサリーに言われてるんだけど、この辺でいいんだよね。知ってる。メラニーとかいう奴の食堂」

「あ、ああ、存じてます。では私が案内いたします。どうぞ、こちらです」

小次郎はどきまぎとして女性を案内した。その女性は一階で狂乱のユリリーと呼ばれていた女傑だった。一年処刑という極めて残酷な処刑を考案し、日々それを実践していたヒステリックで残忍な女性だった。頭に血が上ると前後の見境を完全に忘れる恐ろしい性格で何度も自分のボスであるカイザーに対してさえ、殺意を持って襲いかかる事もしばしばあったらしい。小次郎は恐る恐る並んで歩く女性を観察した。人間離れた体力の持ち主だった。鋼のムチを持ち歩き、その一振りは岩をも真つ二つにした。

「いやさあ、あたしさあ、ここにきてまだ二週間くらいなんだけど、もう働かなければいけないんだってさ。まああたしもそろそろ何もしないことに退屈していたところなんでちょうど良かったんだけどね。でもここでは男は何もしなくてもいいんだってね。女はみんな働くんだってさ。これは完全に性差別だと思わない？遅れてるわよねホント。なんなのかしら。でもまあいいわ。気に入らない仕事ならとつとやめてやるしね。そのメラニーとかいう女にもでかい顔は絶対にさせない。こういうのは最初が肝心だからね」

道中ずっとユリリーは喋りっぱなしだった。小次郎は適当に相槌を打っていた。ユリリーはありとあらゆる事に文句ばかりを言っていたがその様子はとても楽しそうだった。その姿を見ているうちにだんだんと小次郎は安心してきた。やがて店に到着した。

「ここでございます。ユリリー殿。では私は失礼します」

「ちよつとまって！待ちなさいよ。中に入つて。送つてもらつたお礼をするから。あたしは恩を受けるとそれをすぐに返してしまわないと気がすまない性格なのよね。なんだつたら体で払つて上げてもいいんだけど、こんなごつごつした体は男は好かないか」

そういつて自分の腹の辺りをぽんぽんと叩いた。全身バネの鋼のような肉体だった。胸のふくらみはまったく無かった。彼女は小次郎の上着を引つ張つて店内に引きずり込んだ。

「ねえ、ちよつと！店長のメラニーさんはいるかい？」

超満員の店内が静まり返るような人間離れした声量でユリリーは怒鳴つた。そしてしばし後、奥の階段から中年女性があたふたと降りてきた。

「メラニーはあたしだよ。あんたまさか。今日からうちで働くとかいユリリーかい？」

メラニーは気味悪そうな目をユリリーに向けた。

「そうだよ。あたしがユリリーだよ。でも気に入らないね。初対面から呼び捨てはないんじゃないかい？あんた二階で礼儀作法をならわなかったのかい。ふざけんじゃないよ。トウヘンボクめ。あたしがその気になればこんな店、すぐに粉みじんに出来るんだよ。口の利き方気をつけな」

「なにをー、小娘！それが店長に対する口の利き方かい？あんた一階でどれだけブイブイ言わせたのかは知れないけれど、あたしも一階ではサソリのメラニーと恐れられたもんさ。あたしの毒ナイフで何人が死んだと思つてるんだい。あんたここか三階だからつて安心してんじやないよ！」

中年女性が怒鳴つた。ユリリーはそれを聞いて真つ青な顔になり、メラニーの胸倉を掴んだ。

「サソリのメラニーがあんたかい？あたしは狂乱のユリリーといわれた女だよ。あんたとは格が違うんだよ。格が！」

「う、狂乱のユリリー。あんたが……」
とたんにメラニーはおとなしくなった。

「よくあんたみたいなのが三階まで来たね……でもちゃんと二階ではお勉強してきたんでしょね。ユリリーさん。あんたとは争うつもりはないよ。ここは三階なのよ。あんたもそれは肝に銘じておいてよ。しかし困ったわね。あんたにしてもらう仕事なんてねえ……」

しどろもどろにそう言ったメラニーの胸倉をユリリーは離れた。

「おい、店長のメラニーさんよお。あたしを舐めるんじゃないよ。どんな仕事でもやらせてもらおうじゃないの。それにあたしの事はユリリーと呼び捨てにしないさい。それを許可してあげる。それと遠慮なくなんでも指図しないさい。なんだってやってあげるから。皿洗いでも床掃除でも洗濯でもなんでもやるよ。あたしはあたしなりにこの三階の運営には貢献していきたいのさ。もっともあたしはいつまでもこんなちっぽけな店にはいないよ。商売を覚えたらすぐに自分の店を持つ。そしてより大きな貢献をこの世界でするのさ。さあ、指図しないさい。でもちよつと待った！これからしばらくはここにいろ小次郎の世話をさせてもらう。先ほどちよいとした恩義が発生したものでね。その後、指図を聞きに行くからちよつと待ってなさい」

メラニーはぶつぶつと文句を言いながら奥の階段を上がっていった。

「さて小次郎さん。何を注文するんだい？ビールでも持ってこさせようか？」

ユリリーは猫なで声を出してそう尋ねた。

「いや、私はアルコールは絶っております。そうですね……ではお茶でも頂きます」

「それだけ？しらけるなあ。もっと盛り上がろうよ。折角久しぶりに会ったつていうのに」

ユリリーはがっかりした様子でそう言った。そしてこの店の店長のような横柄な口調で店員を呼びつけ、お茶を持ってこさせた。

ユリリーは長い間誰とも話をしなかったような物凄い勢いで小次郎に対して喋り続けた。自分が一階で心変わりをしてもう二度と他人を憎まない事に決めたこと。そしてその意志を五年間貫き通したこと。そして二階に上がったこと。そして女の二階は男の二階と違うらしいことを語った。

「男は図書館らしいわね。女は学校なのよ。これは性差別なんじゃないかしら。はつきりいつて気に入らないわね。でもあたしにとつては二階での経験は素晴らしいものだったわ。先生たちは皆さん全員、素晴らしく魅力的な人たちだった。本当に最高の人たちだった。あたしにとって他人なんてどいつもこいつもクソ野郎ばかりだったけれど、二階で色々な事を学んであたしは変わった。素晴らしい他人たちとの生活があたしを変えた。そしてあたしもあの素晴らしい人たちのような人間になりたいと本当に思っている。あの魅力的な人たちの一員になりたいと切望しているのよ！」

ユリリーはそう言つて泣き叫んだ。相変わらず元気の塊のような女性だった。小次郎はだんだんとユリリーへの警戒心を解いていった。そしてその代わりに非常にユリリーという女性に対して面白みを持った。そして語る言葉、コロコロと変わる表情を飽きることなくいつまでも眺めていた。やがて泣き終わったユリリーは小次郎の事について根掘り葉掘り尋ね始めた。塔に来るまでの生活、一階での生活、二階での生活、三階での生活。まるで小次郎の骨の髄まで把握しようとしているかのようにいつまでも質問は途切れる事はなかった。そして小次郎の方も次から次へと浴びせかけられる質問に對して満更でもない態度で熱心に誠実に正直に答えていた。そして小次郎は自分でも気付かなかった自分自身の思想をたくさん発見することとなった。

熱心に喋り続け、激しく相槌を打ち続けていたユリリーの態度がとたんに凍りついたようにとまった。そして見開いた目で店の入り口の方を凝視した。すぐに我に返ったユリリーはいきなり身を低くして店の奥へと逃げ去った。小次郎が気付いた時にはもうユリリー

はどこもいなかった。彼はユリリーは突然消えたような印象を持った。

「やあやあ、小次郎殿。お久しぶりですなあ。どうですかその後は？同席させてもらってもよろしいかな。あれからまた色々となされたのでしょうか。その成果をお聞かせ願えませんか」

小次郎は自分に話しかけた男を見上げた。やや寂しそうな顔つきながら、無理やり満面の笑顔を作っているカイザーの姿がそこにあった。

「これはこれはカイザー殿。どうぞどうぞ、お座りください。私の記憶が確かであれば昨日午前にお会いしましたね。お互いに用事があった、挨拶程度で別れましたが」

小次郎は丁寧にそう言った。カイザーとは特に約束をするわけではないが、頻繁に会って、情報交換を行っていた。今では何一つお互い隠す事無く腹を割って話し合える関係となっていた。

「今、一階で狂乱のユリリーと呼ばれていた女の人と会ったんですよ。あなたのグループのNo.2でしたね。あなたが現れたとたんにいなくなってしまうましたな」

小次郎は笑ってそう言った。

「やはりユリリー殿でしたか。先日往来でも似たような感じの人を見たのでよもやと思ったのですが。今先ほどその女性とは戸口で目と目が合いましたよ。そして怯えた様子で逃げていかれた。彼女は拙者の素顔を知っている数少ない側近の一人でしたからなあ。どうも拙者は駄目ですね。拙者を見知った顔の人たちはみな拙者を避けようとする」

カイザーは柄にもない弱々しげな苦笑いを浮かべてそう言った。

二人はしばし沈黙し、お互いの顔を見合っていた。

「時にどうですか？夢の連中とは折り合いが付きましかか？」
「やがてカイザーは尋ねた。」

「いや、駄目ですね。とにかく私は誠意が一番だと考えて、今の

私の思想のすべてを隠すことなくすべてさらけ出しています。最近私は結局、人間というものは身内に対する愛だけでは不十分だという考えを持つておるのですよ。身内や恋人に対する愛情は偏愛というもので自分自身のみを愛する事とほとんど変わらないものなのではないかと思っています。愛というものは人間にとつておそらく最も大切なものです。愛がすべてといつても良いのかも知れませんが。しかしどうしても身内のみに対する愛、恋人のみに対する愛、友人のみに対する愛だけではカバーしきれない問題があります。最も自分から遠い存在である人に対する愛情こそが本当に必要な愛情だと思つてゐるのです」

小次郎は早速、自らの考えを披露した。カイザーは目を輝かせて耳を傾けていた。

「博愛の問題ですか。拙者もまさしくその通りだと思います。人に憎まれている者、無視されているもの、そんな人たちに対する愛こそ、必要なのだと思います。身内に対する愛、魅力的な人間に対する愛はたやすいことです。もっともそれもまた素晴らしいものではあるでしょう。しかしそれだけでは確かに不十分です。自分達だけ良ければそれでよいというのではこの世に争いは絶える事はないでしょうなあ。難しい問題です。それで夢の住人たちはそれを聞いてなんと答えます？やはり聞く耳持たずで叫んだり、怒鳴ったりばかりですか？」

小次郎はうんざりし尽くしているようなノロノロとした動作で両手の平で自分の顔をゴシゴシとこすった。

「言葉だけなら何とでも言える。とにかく死んでお詫びしろ。死ねばお前の言葉が誠実なものだと認めてやる。と、言っていました」

二人は長い間、沈黙した。

「論外ですな。拙者はそう思います。違いますかな？」

やがてカイザーは言った。小次郎は頷いた。

「確かに死んでお詫びするというのは適切ではないでしょう。夢

の人たちは私に危害を加える事は出来ないようです。しかし私が彼らに殺害の許可を与えれば彼等はその武器で私を切り刻む事が出来るらしいですな。ご存知でしたか？」

「……それは、気付いていました」

沈痛な面持ちでカイザーは答えた。

「夢の主人はあくまで拙者自身です。彼等は手ぐすね引いて拙者を殺したがっております。殺害の許可を出せば一瞬にして踏み潰され、切り裂かれなどされるでしょうね。恐ろしいことです」

カイザーは身を震わせた。二人はやはりしばし沈黙した。やがて小次郎は言った。

「私はあの夢がなんなのか、どうもいま一つ理解していません。あの夢の住人たちはただの幻のようなものかも知れないのです。その幻のために自分の命を差し出したところで犬死にの可能性が大です。もし仮に彼らの言う事が本場で死んでみせる事で彼らに理解してもらえて、彼らの幸福に貢献できるのならそれはまた話は別ですが、そういう効果が期待できるとも思われません。それに何よりも私は私の命を徹底的に大事にしたいと思っています。他人のために命を投げ出すのは立派な事なのかも知れませんが、私はそれは出来ません。この命は何よりも大切に守り、育んでいくべきだと思っています、それが人間にとっての基本的な、第一の使命だと思っているのですよ」

小次郎は右拳を固めてそう言った。二人はやはり長く沈黙し、テーブルの上のコップや床をじつと眺めていた。

やがてカイザーは天井に目を上げて、しばしそのままの姿勢で物思いに耽り、そのまま何気なく店の奥の出入り口に目を向けた。そしてこっそりとこちらの様子を窺っているユリリーとまたしても目と目が合った。すぐにユリリーは店の奥に消えた。カイザーは小次郎に向き直り、まっすぐにその目を眺めた。小次郎はいつまでもテーブルのコップから目を離さなかった。

「では小次郎殿。拙者は今すぐ片付けたい用事が出来たので、今

回はこれで失礼致します」

小次郎は我に返ってカイザーの方を向いた。そして気のない返事で、ああ、どうも、と答えた。

「拙者は今から店の奥に行つてユリリー殿と話をします。拙者は昔の拙者ではない事を誠心誠意、説明してみようと思つています。ユリリー殿の考えや経験もぜひ色々と参考にさせてもらいたい。彼女は拙者にとっては謎の多い人物です。お互いが腹を割つて話し合えればきつと得るものは大きいと考えます。一階ではほとんど喋つた事はないのですよ。いつも人を介しての連絡の取り合いでしてなあ。お互い、内心では憎み合つていたのですよ。実に恥ずかしいお話です。では失礼致します」

カイザーは珍しく青ざめた緊張した面持ちで立ち上がり、その巨体をゆらして店の奥へとノロノロと進んでいった。やがて店の奥からユリリーの獣じみた物凄い叫び声が聞こえてきた。そしてやがてそれも収まつた。小次郎はしばしテーブルに座り込んだまま、カイザーが戻ってくるのを待つてみた。長い間、彼は戻つて来なかった。やがて小次郎は立ち上がり、店員に向かって片手を上げて、頭をペコリと下げ、そのまま往来へと出て行つた。

32・突然の変化

この日もいつものように、難しい問題を熱心に仲間と語り合い、大いに飲み食いし、身をもがきながら考えに考え抜いた。そしてサリーに頼んで二階から取り寄せて貰った夢の住人たちの身の上が書かれた本を熱心に読んだ後に、くたくたに疲れ果て寢床についた。そして彼はいつものように薄明かりの世界にポツリと立ち尽くしていた。これからまた夢の住人たちが次々とやってくる事だろう。小次郎はそれを待ち構えた。とにかく相手の言い分に熱心に耳を傾ける事、相手の心情を理解することに努める事、そしてその相手の心情をきちんと己の生活に反映させること。よりよく良心的に誠実に生活を改善していくことを続けていくこと。それくらいしか今の小次郎にはとるべき対応方法は考え付かなかった。

.....

なぜか今回はいつまで待っても誰一人、やってこない。彼はただ一人ぼっちで立ち尽くしていた。やがて座り込み、そしてやがて仰向けに寝転んだ。そして住人の訪れを待ったがやはり誰一人来なかった。小次郎は立ったり座ったり寝転んだりをいたずらに繰り返したり、そこらじゅうを歩き回ってみたりした。誰も来ない、何も無い空間であつた。

小次郎は目覚めた。素晴らしい天気だつた。しかし世界はひっそりと静まり返っていた。彼は寢床から起き出して、大広間の方に向かった。いつもは活気に溢れているそこはやはり誰一人いなかった。彼はソファアに座って、葉巻をくゆらした。その後、ピートの部屋

に行つたがいなかった。手鐘をいくら鳴らしても誰も来なかった。彼は屋敷を出て、往来を歩き回つた。人っ子一人いなかった。店にも誰もいなかった。彼は料理場に勝手に入つて、適当に食事を済ませた。そしてどつしりとした態度でテーブル席に座り込んだ。小次郎のひたいには冷や汗が噴き出していた。これはまだ夢の続きなのだろうかと疑つた。それとも三階は終わつて四階に来てしまったのだろうか。しかし世界はいつもの三階そのままの世界である。お馴染みの建物、お馴染みのカウンター。

やがて小次郎は立ち上がり、店を出て、とにかく歩いてまわつた。誰もいない。やがて疲れ果て、屋敷に帰つて、水で体を洗い、寢床に入つて眠つた。やはり無人の夢の世界だつた。悪夢の住人は誰一人現れなかった。

いきなりそんな無人の生活が始まつてしまった。眠つても目覚めても誰一人いなかった。この世界に彼一人だつた。動物も虫もいなかった。物音一つたたなかつた。小次郎は全世界から見捨てられたような心細さを感じていた。突然彼以外のすべての生物が消えてなくなつてしまつていた。

その日も小次郎はぼんやりとした態度でなんの目的もなく歩いてゐた。誰一人いなくなつてしまつてから、彼としても何一つやることもなくなつてしまつた。

ふいにどこからか足音のようなものが聞こえてきた。小次郎は全身を震わせて立ち止まり、熱心に耳を済ませた。しかし長い間何一つ聞こえてこなかつた。そして諦めて再び歩き出した頃、やはりどこかで足音が聞こえた。小次郎はひたすら耳をすませ足音を追つた。その日は一日中、足音を追つたが、結局、何も見つけることができなかった。

それから毎日、どこからか足音が鳴つた。固い靴底でカツカツと

足早に移動するような足音だった。来る日も来る日も、その足音を追ったが、やはりいつも駄目だった。やがて疲れ果て、無人の屋敷に帰り、無人の夢の中に入った。そして目覚め、足音を追った。

その日もやはり、足音の主には出会えず、とぼとぼとした足取りで屋敷に向かっていた。やはり疲れ果てていた。するとふいに背後から人の気配が感じられた。ぴったり真後ろに誰かがいる感覚だった。小次郎は凍りついたように立ち止まった。後ろに誰がいる。心臓が早鐘のように高鳴った。

「あんたさあ、いい加減、つけまわすのやめてくれないかなあ」
出し抜けにそう声を掛けられ、小次郎は震えながら振り返った。
汚い身なりの貧相な女が立っていた。それはこの階のサリーの姿だった。

「サリー！」

小次郎は泣きつ面でそう叫び、いきなりサリーの両肩にしがみついた。サリーは物も言わずにその手を振りほどいた。そしてじっと彼を見つめた。

「どう？ 気が済んだ？」

サリーが尋ねた。小次郎には質問の意味が飲み込めなかった。ただぼんやりと立ち尽くしていた。サリーはそんな彼を見つめ、頭をポリポリとかいた。

「うゝん……で、どうする？ コジ。四階に上がる？ それともまた愉快的な仲間達を呼び戻してあげようか？ 夢の人たちも込みで。あの人たちだって、いい話のネタにはなるんでしょ？」

小次郎は立ち尽くしたままだった。サリーは彼の頬を軽くつねつた。

「すべてがあなたの思い通りに行ったでしょ。でも四階からはそうはいないんだよね。もう誰もあなたを特別扱いしてはくれないのよ。もうここで終わりにしようか？」

サリーは哀しげに微笑んでそう言った。小次郎もつられて白痴の

ように薄ら笑いを浮かべていた。

「どうする？ 気の合う仲間たちをまた呼び戻してあげようか？ 夢の人たちもやがてはあなたを許してくれて、やがては仲良しになるわよ。結局、あなたたちは大の仲良しグループだからね。やがてはかならずそうなるの。あなた方は同類なのでね。結局はみんな、コジ、あなたの気の済むように、思ったとおりになるように、うまく調整してくれるわけなのよ。お分かり？」

「全然分らない」

小次郎はポツリと呟いた。サリーの言ってる事はまるつきりチンブンカンブンだった。

「だからさあ、結局あなたはすべてに挫折した人間なのよ？ それともういい加減気付いて貰えるかなあ。あなたは確かに高校生の頃、陸上競技でインターハイにまぐれで行けたけど、インターハイでは予選であっけなく落ちたよね。あなたの唯一の取り柄だった駆けっこも所詮はその程度でした、ということね。それなのにあなたはなぜか自分が特別偉いか何かのように勘違いしちやっただようね。大学に入って、女と付き合って、あっさり振られちゃったよね。なんで振られたか分かってる？ なんでもかんでも相手が悪いと思ってるんでしょ？ まあ、とにかく、あれね。この世界ではあんたはすべてが結局は自分の思い通りにすることが出来た。可愛いユリリーちゃんとの恋もスタートし始めていた。で、もういいでしょ？ そんな感じ。もうあんたはこの階で満足してもらいたいよね。四階からはもう誰一人あなたを特別扱いしてくれないのよ。また挫折の生活が始まるのよ。だからね」

小次郎は混乱していた。突然冷や水を浴びせかけられたような気分だった。サリーは彼の困惑などまるつきりお構い無しでさらに一方的にまくし立てた。

「だからさあ、それはあんたの祖先の人たちだってさ、まああの人たちには無限の時間があるわけだから時間の無駄という話はないんだけどね。だからいくらでもあなたの気の済むまで付き合ってく

れるでしょうけど、あたしはそろそろうんざりなのよね。あんたの祖先の人たちはこのままあんたの命尽きるまでこの三階であんたと仲良く乳繰り合って行きたいんでしょうけどね。まあ時間は無限にあるんだし。そしてあんたも今の命終わらせて、あの人たちの一員になればそれでハッピーエンドだとは思っよ。ほんと。でもね、あたしとしては本当はあんたには四階に行ってもらいたい。そしてまた挫折と向き合って生きてもらいたい。退屈で地味で、苦しいばかりの生活になるのかも知れないけれど、それが本当の人生というものだからね。その方が結局はあんたと祖先の人たちだって、助かる筈なのよ。本当はその方が嬉しい筈なの。それが結局、近道でもあるしね。まあ分かんないよね。こんな話しても。じゃあとにかく、伝える事だけ伝えて引き上げる事にするわね。あなた四階に上がる？それともこの階で楽しく暮らす？どうする？充実感はないが楽しい生活を選ぶか、充実感はあるが苦しいばかりの生活を選ぶかどっちにしようか？本当はどっちでもいいとあたしは思う。コロコロ違う事ばかり言ってごめんね。本当はどっちでもいいと思う。近道を選ぶか、遠回りを選ぶかの問題だしね。どっちみちたどり付く所はほとんど同じ。じゃあまあ、あんまり詳しくは教えて上げられないからさあ。ちゃんと考えて、選んでよね。決心がついたらまた、あたしは現れるよ。じゃあね。おばかさん」

サリーはそう言うと、足早に去っていった。一人残された小次郎は引き歪んだ顔つきで立ち尽くしていた。

33・勤勉な作業者

サリーの言う四階とは元の彼の世界の事だった。元の世界に戻って来て数年後、小次郎は東京都多摩地区にあるアジアで一番大きいと言われるF工場で働いていた。

「いやあ、急な話ですみませんでしたねえ。橋本さん。急に予約キャンセルしてしまいましたね。でもちょっと作業早すぎますよ。ちよつとスピードゆるめてもらえませんかえ。いやー面目ない」

F工場の営業マン片岡丈は苦笑いを浮かべてそう言った。そして小次郎の顔をチラリと覗いた。目は半分閉じられてしまっていて、ほとんど寝ている状態のように見受けられた。その癖作業は魔法のように手早く片付けられていた。片岡丈と橋本小次郎の二人一組での携帯電話の組立作業であった。

「ちよつと、橋本さん。もしもーし！」

大きな声で再度片岡は声をかけた。小次郎はビクリと体を震わせて怯えたような顔つきで片岡の方を向いた。

「ああ、どうも、片岡さん。なんですか？また移動？」

小次郎はそう言つて片岡の顔をマジマジと見つめた。

「いや、橋本さん。お休みのところすみませんでしたね。でもちよつと作業が溜まってしまいましたね。ちよつと組立のスピードをゆるめてもらいたんですがねえ。このままでは仕掛品が大量発生になつてしまいますよ」

小次郎は製品置き場をチラリと見た。五十台以上はあるだろうか、組立途中の携帯電話が大量発生していた。

「ああ、どうもすみません」

小次郎はそう呟いて、今度は黙々と組立途中の製品を次々に手に取り、組立を完成させ始めた。本来、組立の二人目である片岡のする作業である。小次郎は魔法か手品のような素早い手付きであつたという間に組立を片付け、滞留品はゼロに戻った。

「いやーすみませんなあ。手伝ってもらって。最近はどうも組立作業からは遠ざかってしまってたなあ。お恥ずかしい」

「なんのなんの。では続きを組立てますね。溜まってきたら適当にうつちゃつといてください。私、ちゃんと片付けますので」

小次郎はそう言った。そしてまた半分眠ったような態度で、組立マシンのように黙々と作業を再開させた。すぐにまた滞留品がみるみると発生し始めた。そのあまりの手付きの素早さに片岡丈は呆気に取られ、しばし作業を忘れていた。

塔から元の世界に戻った小次郎は、大学をやめた。どうしても単位を取る為だけに興味のない勉強を無理やりする気にはなれなかった。そしてその後、韓国で出版の仕事をしていた父のマンションからしばらく韓国語学校に通った。その後、父の仕事がうまく行かなくなり、父と共に日本に戻った。そして父は韓国食品の店を始めた。小次郎はそれには参加せずに住み込みの工場勤務を始めた。滋賀県の工場だった。そこで八十万円程度の貯金をし、東京に戻ってきて、昭島市にアパートを借りた。その後、失業保険を貰いながらぶらぶらとした生活をした後に、現在のF工場の方へ入ったのだった。

「ちょっと橋本さん。起きてください。じゃあ私、そろそろ行きますから後、お願いしますね。まだだいぶ溜まってしまってますわけない。どうします？まだしばらく働きますか？それとも上がりますか？」

片岡丈は藤岡弘のような渋い声でそう尋ねた。

「いや、まだしばらくやります。移動ですか？」

「いや、しばらくここで大丈夫ですよ。移動したいですか？」

「いや、別にどうでもいいです」

「はははは、そうですね。じゃあ、また後で聞きに來ますんで宜しく。なんかあったら携帯に連絡して下さい。でも橋本さんちよっ

と働き過ぎですよ。なんか心配事や悩み事があるみたいけどいつでも相談に乗りますからね。とにかく体調には気を付けてくださいね。体調がすべてですからね。体調がすべて。体調さえ良ければどんな事でも自動的にうまく行くものですよ。なんでもかんでも自動的に解決しますよ。これ本当ですよ。まあ私よくグラウンドでジョギングするんですけど、良かったら今度一緒に走りましょう。その後、焼肉でもおごりますよ。じゃあそろそろ行きますね。ではまた」

小次郎はここ半年はF工場に入り浸りで働いていた。この工場には一時間200円のカプセルベットルームが用意されていた。シャワールームもあり、ロッカーもあり、コンビニも入っていて、コインランドリーまであった。この工場で働き始めて、もうかれこれ二年ほどになる。短期勤務の労働者ばかりのこの工場では小次郎はベテランの部類に入った。彼は片岡丈から携帯電話を持たされていた。そして急に人手が必要になったり、欠員が出た場合などには連絡が来た。小次郎は昼も夜も関係なく、ほとんど毎日、平均して十二時間以上働いていた。疲れたらカプセルルームで三、四時間の睡眠を取った。そしてまた作業に参加した。この工場は三、四時間をサイクルとした勤務時間になっていた。8時から12時まで。13時～17時。18時～22時。23時～3時。4時～7時。その繰り返しである。

小次郎はひたすら働きに働いた。昼も夜も一律時給900円にも関わらず、貯金は300万近くになった。

とにかく彼は未だ自分が許せなかった。塔の一階での殺人行為は彼の良心を根強く責め苛んだ。彼は自らが殺した相手の真実の姿を塔の二階の読書で知っていた。そして彼等は絶対にこんな風に軽々しく殺されてはいけない人たちだった。自分の命を守るためのギリギリのところでの殺人は百歩譲って仕方がないと言えなくもなかった。しかし面白半分、遊び半分で行った殺人行為に関してはどうし

ても自らを許す事が出来なかった。彼は齒を食いしぱり続け、顎関節症の症状が出てきた。ノドや顔や頭が痛かった。小次郎が面白半分で殺した相手、彼等は絶対に、絶対に、そんな風には殺されては行けない人たちだった。そんな事をしては絶対にいけない愛すべき人たちだった。それを彼は面白半分で殺してしまった。見栄のために殺してしまった。女にいい格好をするためだけに、仲間たちの前でいい格好をするためだけに、軽々しく殺してしまった。その事を考えると小次郎はいたたまれなかった。今まで存在したどんな犯罪者も誰一人として自分がしたような感覚で人を殺した人間はいなかったと思われた。自分がしたことはどうしても許されるものではないと思われた。どうしてもこの良心の呵責は消えなかった。

自らの命を絶つことも出来ない。自分自身の命は自分一人のものであるとは思えなかった。先祖から受け継がれてきた大切な命だった。親のため、先祖のためにも、この命は大切に育んでいくべきだと思った。ではどうすればいいのか？どんな風に生きていけばいいというのか？この疑問は彼の心にへばりついていった。そしてF工場で黙々と作業して、色々な人たちを見て、その答えを常に探し求めた。自分にはなんの取り柄もなかった。学も無かった。とにかく、殺人は心から悔いていた。そしてこれからは他人を殺す人間ではなく、他人を活かす人間になりたいと思った。他人を喜ばず、困っている人を助ける人間。世のため、人のためになる人間。他人の幸せに貢献できる人間になりたいと思った。しかし具体的に何をどうすればいいのか検討も付かなかった。自分の無力を痛感するばかりだった。

ひっそりとした休憩室の片隅で小次郎はお茶とおにぎりで食事を済ませた。次の勤務は23時からであった。彼は目を閉じ浅い眠りに入った。そして時間が来ると職場へと戻った。

「よお、橋本くん！かしなんだな。君はいつも居るね。さながらこの工場が君の家のようだね」

小説家志望の27歳、岡本圭介が満面の笑顔で小次郎をむかえた。

「ああ、どうもどうも」

小次郎は少しほっとしたような表情でそうこたえた。連続の勤務も長くなって疲労が溜まってきていた。見知らぬ人間や嫌な人間ではなく、気心の知れた岡本圭介が作業のパートナーで安心したようだった。

「じゃあ早速流しますね」

小次郎はそう言って早速、作業を開始した。岡本圭介もこの現場ではベテランであった。そのため猛烈なスピードで作られる仕掛品も楽々と片付けていった。

しばらくの間、黙々と作業を続けた後に早くも単純作業に飽き飽きしてきた岡本圭介は、あれこれと小次郎に話しかけ始めた。あれこれ話しかけても小次郎は気の無い返事ばかりであったが、ドストエフスキーの罪と罰を先日、読み終えたという話に小次郎は少し食いついた。小次郎が大好きな本の一つであった。小次郎が興味を示した事で岡本圭介は大喜びでテンションはとたんに上がった。そして罪と罰を読んだ感想をあれこれと語り始めた。

罪と罰において、ラスコーリニコフは殺人という罪を犯した。その結果、その後苦しみの日々を送った。岡本圭介はしばし読書の感想を述べ続けた後に、こういう彼自身の意見を語った。

「ラスコーリニコフが殺人という罪を犯して苦しい日々を送る羽目になったのと反対に、罪とは反対の事をすれば人間は幸せになれるんじゃないかと思うんよねー。つまり殺人の反対の行為。活人行為。つまり人の命を助けたり、困っている人を助けたり、苦しんでいる人を救ったりとか、そういう類の事が罪とは反対側の行為だと思っんよねー。罪とは殺人のことで、それとは反対側の活人行為

というものをしていけば、やがて必然的に人間は幸せに辿り着けるのだと考えるんよねー。どう？面白くない？俺はそこらへんの事をテーマにして最強の小説を書いてみようかと思うんよねー。タイトルはやっぱり「善と幸」。善を行い続けた人間が必然的な流れの中でやがて幸へと辿り着くという愛と感動の物語なんよねー。ドストエフスキーの罪と罰に匹敵するような偉大な作品に仕上げて、俺は印税で大金持ちになる。そしてみんなから頼み込まれて政界に進出して、そしてやがては首相になって、女優かなんかの愛人をたくさん持つような感じの人間になるんやないかねー。でへへへ。その時は橋本くんも俺の家の犬の世話係に雇ってやるよ。月給100万円でひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ」

「善と幸、活人行為ですか」

小次郎は驚いて岡本を見つめた。これとまったく同じ考えを小次郎も持っていた。そのあまりの偶然にしばらく小次郎は岡本を疑わしげに睨んでいた。岡本はその視線にはまったく気付かず、ますます色々と今後の自分の輝かしい未来について語り続けていた。

『特別、珍しい考えでもないのかも知れない。あの本を読んだ人にはそういう風な考えが浮かぶようになっていくのかも知れない』
やがて小次郎はそう考え、再び黙々とした作業へと戻った。

「でさあ、橋本くん。冗談はこのくらいにして実際の話、俺にとっての活人行為とはティーンエイジャー男子たちの底無しの性欲のニーズに応える事なのだと思うてるんよねー。最近俺さあ、ホームページを立ち上げちゃってさあ。その中で俺の豊富な性風俗体験を活かした貴重な情報の数々を発表してあげてるんよねー。本番無しの風俗店でテクニクを駆使してセックスしてのけた話とか、女のGスポットの研究の成果とかねー。でさあ、エロスの仲間たちも大量発生しちゃってさあ。2チャンネルとかSNSとかで盛り上がりつつちゃってさあ。実際に色々なエロテロリストたちと会って色々とう口情報を交換しあったりしてるんよねー。桃色ゲーマーというエロス研究団体を作ったんやどねー。実際会って情報交換する同志たち

はもう三十人近くいてさあ。ＡＶ業界やエロ本業界の人とかも居るよ。あとエロビデオ屋の店長とかね。

そうそう、この間、橋本くんの元彼女の長谷川優子ちゃんも俺たちと一緒に遊んだよ。

彼女ベロベロに酔っ払っちゃって俺たちいっぱい彼女の体触っちゃったよ。

ホントにいい体してるよ。スレンダーで出るところ出てて。

でねー、彼女はまだ結構、橋本くんに未練があるみたいだよ。なんか彼女が浮気なんかしたんだっけ？すっげー泣いてたよ。落ち込んだで。うん。

まあその後、はじけまくったけど。でへへ。

どうだい、橋本くん、よりを戻すのなら協力するぜ。あんな可愛くてナイスなバディーの女の子、ほっとく手はないぜ。やりまくっちゃえよ！

エッチはしてないんだろ？もったいない話だぜえ」

岡本圭介はつばきを飛ばしながらそう小次郎にまくし立てた。

「ははははは」

小次郎は愛想笑いのみで何も答えなかった。彼は現在、性的に不能状態だった。ここ数年、一度も勃起していなかった。

朝７時まで岡本圭介と作業をこなし、その後、８時から岩淵という男と作業をした。岩淵はＤＪをしている男で作業中、ずっと歌を口ずさんでいた。その合間、ちよくちよくと小次郎に話しかけ、小次郎はやはり愛想よくそれに答えた。とにかく小次郎は誰に対しても愛想良くしていた。接する人間すべてを自分の先生のように思っていた。誰に対しても一切逆らわなかった。そのためみんな小次郎との作業を喜んだ。最悪の性格といわれている人間も小次郎には良い面を見せた。小次郎はいつも引きつったような顔つきでひたすら愛想良く振る舞っていた。

午後5時になり、ようやく小次郎はワンサイクルの休憩を取る事に決めた。携帯電話で片岡丈に一度作業から外れて、また午後11時から入る旨を伝えた。今回は長かった。一日半くらいぶつつけで働いていた。それでもそれほど疲労はなかった。今回は比較的一緒に働くメンバーに恵まれたように思われた。どうしても大変な相手との作業であった場合、ワンサイクル休めば、違うメンバーの現場に移る事が出来た。

『誰一人否定してはならない。誰一人憎んではならない。嫌ってはならない。憎しみは誤解から生まれるものだ。お互いの事を心の底まで理解し合えば、きっとどんな人間とも愛し合う事が出来る筈だ』

小次郎は水シャワーを浴びながらそう自らに言い聞かせていた。正直彼は、誰に対しても愛想良く振る舞う事にいい加減、うんざりし始めていた。人皆わが師。そういう考えでいるのだが、それもういい加減、やめたくなることもしばしばだった。

『とにかく知識を知恵に昇華することだ。私は過去の知識や経験ゆえに現在楽になっているよりもむしろはるかに苦しんでいる。塔での経験ゆえに、塔以前の経験ゆえに、さまざまな知識ゆえに、今現在幸せになっているよりもむしろはるかに不幸になっている。しかし本当は己の知識、経験を己の幸に結びつける生き方はきつとある筈だ。己の知識、経験を知恵へと昇華させる生き方はきつとある筈だ。そうだ。いつも常に新しい気持ちで、いつも常にこの世に生まれたばかりのような心構えで、初心を忘れずに新しい気持ちで日々を送る事が有効ではないだろうか？それととにかく冷静であることだ。私はあまりにも短気すぎる。すぐに憎しみにとらわれすぎる。すぐに腹を立てすぎる。そしてすぐに目がくらみ、状況が見えなくなる。盲目となってしまふ。それではきつと駄目だ。とにかく冷静

であること。私は人一倍、気短な人間であるがゆえになおのこと、冷静であること。そう、冷静さがすべてといってもいいくらいだ。そう冷静さがすべてだ。冷静であることだけを心がけて生きていてもいいくらいではないか？充分に冷静であり続ければ知識を知恵に昇華するやり方もやがて見出せるのではないだろうか？とにかく常に初心を忘れず、いつも常に新しい気持ちで、そして冷静に。冷静さがすべてくらいのつもりで……」

小次郎はぶつぶつと独り言をつぶやきながらシャワーを浴びて、洗濯済みの下着とジャージの上下を着た。そして作業着や汚れた下着をロッカーに仕舞った。まだ洗濯をしなくても大丈夫な状況だった。小次郎は受付を済ませてカプセルルームに入り、目覚ましをセットして電気を消し、布団をかぶり目を閉じた。

34・小次郎の夢

小次郎は真つ暗闇の中にいた。これは覚えのある場所だった。これはあの悪夢の場所だった。彼は立ち尽くし、待ち構えていた。一人、また一人と人がやって来た。皆無言であつた。その表情は暗く見えなかった。次から次へと人がやってきた。そして辺りは人でいっぱいになった。そしていきなり目もくらむ強烈な光が起こった。小次郎は目を閉じた。そして長い時間を経た後、再び目を開いた。

小次郎は輝くばかりに美しい世界の中にいた。

仲間達は穏やかに微笑んで彼を見つめていた。

両手をふるユリリーの姿があつた。それは彼が小学六年生の時に死んだ祖母のしぐさに見えた。

斜に構えて両手をズボンのポケットに入れ、にっこりと小次郎に微笑んで軽くうなずいているピートの姿が見えた。それは彼が小学三年生の頃に死んだ剽軽者のおじさんのしぐさに見えた。

鋼鉄の鎧を付けて、かぶとを脱いでいるカイザーの姿が見えた。

その顔は満面の笑顔だった。それは小次郎が生まれる前に死んだ祖父の写真を思い出させた。

ガンジルの姿が見えた。彼が殺した人たちの姿も見えた。その身内の人たちの姿も見えた。その他にも塔で出合った人たちの姿がたくさん見えた。みな優しく、温かく、穏やかに、微笑みかけていた。

ピートがニヤニヤしながら小次郎の前に進み出て来た。そして言った。

「おい、小次郎。別に活人なんてしなくていいんだぞ。善人になんてならなくてもいいんだよ。お前は別にほら、普通にお前らしく

生きて、そして生き抜けばそれで充分なんだよ。おじさんはそう思うよ」

次はカイザーが満面の笑顔で進み出て来た。そして言った。

「小次郎、何はともあれ忘れないで欲しい。わしらはお前を永遠に愛し続けているからな」

小次郎の目から涙が溢れてきた。

「ぼくのようなクソ野郎を許してくれますか？」

小次郎は泣きながらつぶやいた。

今度はユリリーが泣きながら進み出て来た。そして言った。

「そんな事を二度と言わないで。あなたが自分の事を悪くいうのは私たち全員を悪く言う事と同じ事なんだからね。あなたが自分を侮辱することは私たち全員を侮辱する事と同じことなんだからね」

さまざまな人が小次郎の前に進み出て来て、温かい声をかけた。

「頑張れよ。頑張れよ。応援してるからね。永遠に小次郎、お前の事を永遠に愛し続けているからね。それは絶対に忘れるなよ」

この世界ではすべての悲惨はもう過去のものとなっていた。

仲間にとつての苦しみは、自分にとつての苦しみで、仲間にとつての喜びは、自分にとつての喜びだった。

彼は仲間たちを愛していて、仲間達も彼を愛していた。

そしてお互いを温かい微笑みで、見守っていた。

たった一人の苦しんでいる人も、よってたかつて皆から愛情を受け、心はすぐに満たされた。

苦しみはどこか遠くに消え去った。

目が見えない人間もそれを悲しむ事はなかった。

自分が目が見えなくても仲間達は目が見える。

それで充分だった。

醜い人間もそれを悲しむ事はなかった。

自分は醜くても美しい仲間もいる。

それで充分だった。

脚の弱い人間も悲しまない。

彼には元気に歩き回る仲間がいる。

何か足りない物を持っている人はそれをまったく悲しまない。

仲間の中にはそれを持っている者がいるのだから。

この世界には競争はなく、ただ愛し合う仲間たちがいた。

仲間の成功は自分の成功と同じ事だった。

そしてもう何一つ哀しい事はなかった。

哀しみはすべて終わったのだ。

我々が一つのものに返り咲いてから、すべての人間がお互いを愛し合っていたから、もう誰一人不幸な人間はいなくなった。

一人の苦しみは、すべての人間の苦しみと同じ事だった。

すべての哀しみはもう通り過ぎた。

目覚ましのベルが鳴り、小次郎は目を覚ました。涙がとめどなく溢れていた。しかしとても温かい気分だった。何かとても楽しい夢を見たような気がした。ほんの少しの睡眠であつたはずなのに彼の体には活力がみなぎっていた。彼は涙を拭い、ロッカールームで作業着を着た。そしておにぎりとお茶で食事を済まし、掲示板を見に行った。掲示板には作業場とメンバーが載っていた。そして現場の方へと向かった。なかなか悪くないメンバーであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2094e/>

塔

2010年11月6日14時31分発行